

## JICA教師海外研修 報告書

提出日	平成16年8月16日	訪問国	マラウイ共和国
学校名	愛知県知多郡武豊町立武豊小学校	氏名	榊原 喜子

## 1-1. あなたやグループとしての現地研修への目的やねらい（主眼点・期待など）

今まで総合学習で、国際理解教育をいくつか実践してきた。しかし、私がやってきたことは、異文化理解程度のもにとどまっていた、もう一步踏み込んで子どもたちにもう少し深いところまで感じたり、考えさせたりすることができなかった。それは、自分が現地の本当の様子を知らないことや、国際理解や国際協力を行う上での基本的な考え方を知らないということがあり、間違ったことを教えてしまうのではないかという不安があったからである。今回の研修では、現場の生の様子を見て、どんなことが本当に必要とされているのか、相手に将来にわたって喜ばれる国際協力とはどのような形であるのかを見てきたいと思っていた。

## 1-2. その目的やねらいの達成度

8～9割程度は達成できたと感じている。今回は2週間という短い期間であったので、もっと奥深い問題点や苦勞、悩みなど、もしかしたら見えずにおわっていることもあるのではないかと思う。

## 2-1. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

マラウイの人々は明るい。礼儀正しい。ひかえめ。

私たち日本人が忘れかけている「古き良き日本人」の姿をマラウイの人たちは持っているように感じた。時代や場所が変わっても、かわることのない「尊敬される人間のありかた」をマラウイの人から再認識させられた気がした。

## 2-2. 参加者・スタッフから学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

リロングウェ空港に到着するやいなや、ロストバゲッジ。このアフリカでロストバゲッジか～。目の前が真っ暗になりました。でも、参加者の皆さんやJICAの現地スタッフの方などが、親身になって心配して下さり、いろいろなものを貸してくださったりしたので、バゲッジが見つかるまで、なんとか無事に過ごすことができました。本当にありがとうございました。これからは、私も、困った人を見たら、その人の気持ちになって、自分ができることをさっとできるのではないかと思います。

## 3. 現地研修の経験の 何を何につなげよう と思ったか

- ・魚の養殖池を数人の女性だけで手で掘っている
- ・水くみ、炊事などとても時間がかかり、力がいる
- ・子どものおもちゃはお手製
- ・子どもが家の手伝いをよくする。家族に対しても礼儀正しい。

このようなことから、自分の生活と比較し、「自分は汗を流すことをあまりにしていないのではないか、いろいろなものがあまりに簡単に手に入りすぎないか、自分のことしか（自分のことさえ）考えていないのではないか、人への礼儀を忘れていないか」と子どもたちに投げかけ、自分の生き方を見つめ直す機会とさせたい。

・マラウイの小学校やセカンダリースクールの生徒の様子を伝えることにより、日本の子どもたちに、文通を通して交流したいという気持ちを起こすことにつなげたい。この文通が、お互いに楽しみや、はげみや、刺激になればよいと考える。私

が受け持つ子どもは小学校4年生である。小4の子どもたちが、遠く離れた日本からできる国際協力はないかといういろいろ考えたが、JICAの隊員の活動やJICAの援助の基本的な考え方を思い起こすと、小4の子にできそうなことはなかなか思い浮かばない。私にできることは、将来国際協力ができる人材を育てるという考えに立ち、どの国の人にも親近感をもち、仲良く共生しようとする資質を育てておくことであろうか。また、時代や場所がかわっても、かわることのない人間としての大切なこと「努力、礼儀、」などを子どもたちに再認識させることであろうか。安易な寄付活動やイベントに終わらず、心を育てるような活動につなげていきたいと思っている。

#### 4. JICAの開発援助事業に対する感想や提案

海外協力隊の献身的な活動に、本当に頭が下がる思いがしました。過酷な環境下で、現地の人々の生活向上のために、常に工夫や努力をし、現地の人と一っしょいになって汗を流す隊員の姿に心からエールを送りたいと思います。

一番心に残ったのは、「ただ、ものをあげるのは援助ではない。自立できるための技術を伝える」というJICAの基本的な考え方です。現場に溶け込み、そして持続可能なすばらしい考え方だと思います。今回、いくつかのJICAプロジェクトの視察を通して、わたしたち教師が国際理解教育をしていく上で、私がずっと探し求めていたベースとなる考え方をいただいたと思いました。

#### 5. 研修（事前研修等を含む）に参加して良かったことや、より良くするための提案

JICAのプロジェクト視察、庶民のマーケット見学、ホームステイなど、普通の旅行ではできないことができたこと。現地を肌で感じることができた。現場を見るということは、何よりも一番の研修だと思います。本や資料をいくら読んでも、現場を見るということの効果には全然かきません。百聞は一見にしかずです。でも、現場での見聞をより効果的にするためには、指導者研修でいろいろブレインストーミングしたり、考えをシェアしあったりすることは、意識をたかめるのには必要だと思いました。今回、6、7月の指導者研修には出席しないで、いきなり現地研修に参加という方も数名みえましたが、現地研修の目的やねらいの深さ、意識の面で、指導者研修をつんできたメンバーとは温度差があったように思います。教師海外研修に参加する人は、年4回の指導者研修が必修ということも条件にしてもよいのではないかと思います。

#### 6. その他全般を通じての感想・意見など

今まで、いろいろなところへ出かけてきた私ですが、マラウイが一番強烈な印象です。今回の研修では、普

通の旅行ではできないような貴重な経験をたくさんさせていただきました。これらの経験を通して、国際理解教育をしていくための基本的な考え方が分かった気がします。このようなすばらしい企画に参加させていただいたことに心から感謝しています。本当にありがとうございました。

7. 訪問先ごとの気づきと築きなど

・「マナビノオト」に書き留めたことをふりかえり、まとめてみてください。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか/その他感想
7/30(金) リロングウェ →ゾンバ	ドマシ教員養成大学 視察	高校の成績がよくて入試に受からなければ、入学できない。教員の数が非常に不足しているので無免許の教員も多い。カナダ、USA、フランスなども学校建設に協力している。通信制のコースもある。ハード面、ソフト面ともに向上が急がれると感じた。
	小学校訪問と交流	村人も大勢集まり、私たちを歓迎してくれた。エイズ防止に関することを歌、踊り、寸劇を通して披露してくれた。このような方法で人が大勢集まる場を利用して、エイズ教育を普及していくのだなとアイデアの良さに感心した。人々の歓迎するピュアな気持ちに心を打たれた。
7/31(土) ゾンバ	ドマシ水産養殖プロジェクト視察	たった13人の女性たちが手だけで魚の養殖池を掘っている姿に、ただただ頭が下がった。「頑張っている人には支援をしたい」という大溝専門家の活動には心をうたれ、涙がでた。常に村人の自立を願って活動をしている。援助のあり方やいろいろな矛盾について深く考えさせられた。マラウイの社会的な慣習もマラウイの発展の障害になっていると感じた。今回の研修で一番印象に残る視察であった。
8/1(日) ゾンバ→ リウオンデ	リウオンデ国立公園 ツアー (野生生物)	予約がとれていなかったため、ほとんどみることができずに終わり、たいへん残念だった。カバ、ゾウ、シカの種類、サルなどをチラッとみることができた。
8/2(月) リウオンデ→ リロングウェ	小規模灌漑技術開発 調査 (Tilime 村、 Tikorele 村、Mank- hamba 村視察)	家泉調査団員が指導している灌漑技術は、マラウイの現状や普通の人々の思考レベルにあったたいへん優れた方法であると思った。マラウイの人が力を使って水を運んだりする苦勞がないように、斜面や勾配を利用した灌漑施設。現場で手に入る自然の材料、安く手に入る材料を使うこと。これらは、人と自然に優しくありたいという願いがあって生まれた方法だと思った。簡単な技術だけれど、すごい工夫がいっぱいで感心の連続だった。だからこそ、人々に伝えやすく、現地に根付き、将来も持続していけるすばらしい支援の形だと感じた。村人が良さに気づいてやりたいというまで待つ姿勢、決して強制しない姿勢もすばらしいと思った。
8/3(火) リロングウェ →ロビ	現地青年海外協力隊 員との交流・情報交 換会 (隊員との昼食 会を含む)	大勢の日本の若者が協力隊として、遠く、そして不便な土地でも力いっぱいがんばっていることを実感。最近こちらに到着したばかりで、とても不安そうな様子の隊員もいたが、1年もすると、どの隊員もすっかり自信がついて顔つきもかわっていた。海外協力隊とは、任地の人々の生活向上のために協力をするという目的の他に、日本の若者にとっても、精神的に成長でき、優秀な若者に育つことができるという働きもあると思った。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか/その他感想
<p>8/3(火) リロングウェ →ロビ</p>	<p>マーケット見学</p>	<p>庶民のマーケットを本当にじっくりとみることができた。カメラをむけると「撮ってくれ」と黒山のひとだけりがすぐできる。清水隊員から、カメラや持ち物に注意しろとよく注意されたが、マラウイの人は礼儀正しくておとなしく、何かをひたたくっていくような人には見えない。誰もが、フレンドリーで、暖かい感じのするマーケットだった。</p>
	<p>現地人宅へのホームステイ</p>	<p>運良く、電気がきているお宅で、まずは一安心。近くの井戸まで水くみを手伝った。ホストマザーは、頭に大きなバケツをのせて運んでいた。ちょっとやらせてもらったが、重すぎて1秒ものせていられなかった。第一バランスが難しい。家の外にあるかまどで夕ご飯の支度を手伝った。水くみ、炊事と、女性は重労働の連続だ。子どもたちもよく手伝っていた。夕食は伝統料理のシマと野菜炒めと、マラウイでは貴重品の卵を使った卵焼きである。マラウイの習慣で、客人は主人と食事をする。他の家族や子どもたちとは同じ部屋で食事をしない。女と男は同じ皿から食べない。夕食後、ホストファミリーと夜遅くまで話をした。日本のことや私の家族や仕事の話をとっても興味深そうにきいてくれた。ホストファミリーの6人の子どものうち2人は首都へ出ている。親戚の9歳の女の子も同居している。マラウイでは、親戚の人が同居しているのはよくあることで、助け合いの社会を象徴している。朝はまだ暗いうちからマザーは掃除やら朝ご飯の支度やら。女性は本当によく働く。ホームステイは、今回の研修で一番思い出に残ったできごとである。</p>
<p>8/4(水) ロビ→ リロングウェ</p>	<p>ロビ園芸適正技術普及視察</p>	<p>協力隊が何代にもわたって果樹栽培の技術指導を続けてきた成果がよく表れていた。持続性ということの大切さがよく見てとれた。清水隊員は23歳という若さなのにともしっかりしていて、マラウイの人たちに溶け込んで、がんばりたいという気持ちがあふれていた。日本では、ほぼ絶滅したと思われる、実にさわやかな青年だ。子どもたちの文通を実現させたいという話をしたところ、ロビの小学校の児童と本校の児童が文通できるようにとりはからってくれるということで、帰国してからの授業展開に希望がもてた。</p>
	<p>ロビ・野原隊員任地視察(理数科教師・チュワ中等学校)、生徒との交流</p>	<p>日本語の模擬授業を担当させていただいた。英語で日本語を教えた。日本語のあいさつ、漢字、日本語の単語など。どれもとても興味深そうにきいてくれてやりがいがあった。生徒の集中力と物覚えの良さに感心した。2時間目は習字。「友情」「夢」「愛」など、意味や読み方を説明してからいざ実技。習字道具は日本からたくさん持っていった。生徒たちは、習字は初めての経験で、筆で書く感触がおもしろらしく、とても楽しそうに次々と書いていた。できた作品に名前をカタカナでかいてあげると、とても喜んでくれた。そして、そのカタカナでかいた名前を覚えようとしている様子だった。生徒たちはとても礼儀正しく、純朴で、とてもかわいかった。もっともっといろいろなことを教えてあげたいと思った。寮の部屋も見せてくれた。大部屋に全員が寝泊まりするだけのもので、日本人の寮の概念からはほど遠いものであった。このような環境でも、勉学に熱心に取り組む生徒たちに頭が下がった。日本の子どもたちは甘えているなど思った。お礼に歌ってくれた歌がすごくうまいのでびっくり。マラウイでは歌が生活の一部になっている。いつでもどこ</p>

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか/その他感想
		でも、歓迎やお礼の意味で、また働きながら口ずさんだり。だからみんなすごく歌がうまいし、だれとでもすぐにハマることができる。日本人にはまねのできないずばぬけた感性であろう。
8/5(木) リロングウェ	ミサレ・峯隊員任地視察(理数科教師・中等学校)、生徒との交流	ロビのチュワ中等学校より、町にあるせいか、生徒数が多く、教室は満員状態。制服はない。マラウイの生徒は体は大きいが実に純朴である。ここでも、ロビの中等学校で行ったのと同じ日本語と習字の授業を行った。生徒達の興味・関心は高く、とても楽しそうにとりくんでくれた。すごく楽しかった。こうも受けがいいと、自分は外国で日本語や習字を教えるのにむいてるんじゃないかと思ってしまう。野元隊員に「日本語教えるのうまいですね。日本語教師になれますよ。」と言われて気をよくしたのでありました。
	保健行政アドバイザーとの情報交換	マラウイのエイズの現状に、絶望感に近いものを覚えた。この現状を改善するためには、社会的な習慣や人々の意識もかえていく必要があるだろう。平均寿命が37、8歳だなんて、ひどすぎる。マラウイの発展のためには、まずこの命の問題を改善していくことが最優先かもしれない。
8/6(木) リロングウェ →ケープ マクレア	ムーア博物館見学	ローカルで、宗教色の強い博物館という感じだった。展示されている祭礼で使われる人形やかぶりものは、どこことなく日本のなまはげなどと近いものを感じた。
8/7(土) ケープ マクレア→ リロングウェ	ケープマクレア散策	世界遺産だけあって、その透明度は息をのむほどだった。ここに住血吸虫がうじゃうじゃいるなんて信じられなかった。つい、手をいれなくなるほどの美しい湖だった。
	JICA 現地関係者との懇親会(7/29のJICA マラウイ事務所訪問オリエンテーションを含む)	日本での事前研修では、マラリアの心配はないということで安心して7月29日マラウイに到着した。直後にJICA事務所でマラウイの深刻なマラリア事情を聞かされ、そのまま地獄に突き落とされた気がした。その他、肝炎とか住血吸虫などの寄生虫の話とか・・・すごいところに来てしまったと思った。でももう来てしまったし、どのように自分を守ろうか真剣に考えた。その後「ホームステイは中流家庭に、一軒に2~3人ずつ泊まる」という事前打ち合わせどおりでなく、「ホームステイはマッシュルームハウスです。一軒にひとりずつです。」という内山所員の話に、全員絶句してしまった。しかし、これで腹をくくったというか、度胸がすわったというか、開き直ったというか。どうしたらよいかを真剣に考え、前夜は真剣に持ち物の準備をした。JICAの人はすごいことを悪気なく、実に普通にさらっと言っただけ。おもしろい。ロストバゲッジも含めてこの研修では何度か崖っぷちにたつたような場面があった。今日、明日をとりあえず無事に過ごすためにどうしたらよいかこんなに真剣に考えたことはあまりない。本当によい経験だった。
全体	全体を通じて、又は上記各訪問先以外の場面	普通の旅行では経験ができないような、貴重な経験をたくさんさせていただいた。これらの経験を通して、自分自身も見聞が広まったし、少々のピンチには動ぜず、どうしたらよいか次を考えることができるようになったのではないかと思う。これからの教育活動に必ず生かしていきたいと思う。

## JICA教師海外研修 報告書

提出日	平成16年8月23日	訪問国	マラウイ共和国
学校名	名古屋市立中央高等学校 昼間定時制	氏名	鈴木富雄

## 1-1. あなたやグループとしての現地研修への目的やねらい（主眼点・期待など）

- ① 教師自らが現地に行って体験したことを、ステレオタイプにおちいらず、いかにポリフォニック（多声的）な観点で生徒たちに伝えられるか。
- ② 海外で活躍する海外青年協力隊員の活動を実際に見ることで、その活動の苦勞・成果・課題などを具体的に知る。
- ③ 現地の人たちとのふれあいを通して、現地の文化、現地の自然の豊かさを感じる。

## 1-2. その目的やねらいの達成度

- ① ② ③についていずれも予想以上の成果をあげることができた。
- ① については生徒たちへの実践はまだであるが、教師自らが、電気もガスも水道もないのが普通である生活を体験でき、それだけでも自分自身の思いこみ（これだけ便利になったんだから世界中どこでもたいして変わらないだろう）を打破することができた。
- ② については、現代の宮沢賢治のような献身的に活躍する隊員・専門家の方の姿に、これも畏敬の念を覚えた。
- ③ についてもホームステイの方の心配り、常に歌で迎えてくれる現地の方々、そして世界遺産マラウイ湖（ケープマクレア）のすばらしさなど、生活は貧しいが、心豊かな人々とすばらしい自然に触れることができた。

## 2-1. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

1-2で書いたことと重複してしまうが、やはり貧しいこと、ものが足りないことがイコール不幸と言えるかについて考えさせられた。むしろ貧しいから、ものが足りないからこそ今あるものを大切に工夫して、みんなで分かち合って使おうという知恵と心配りが生まれる。そして純粋な気持ち、ちょっとしたことにも喜べる笑顔が生まれる。それが、わたしたち人間にとって一番大事なものではないだろうか。翻って現代の日本社会で起きている物質的な豊かさの中のゆがみこそ、精神的な貧しさと言えないだろうか。

## 2-2. 参加者・スタッフから学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

このマラウイ参加者14名は、それぞれ個性的な方々で、またその個性を生かしながら協力的で、いいメンバーに恵まれた。甲斐・三島両スタッフについても、ともすれば我々が、マラウイ時間におぼれそうになると、日本的規律を思い出させてくれるアドバイスを適切にしてくださった。

この16名で、国際理解教育を主眼とする学校を（JICA・NIEDが設立母胎になって）作ったらすばらしい学校になることだろう。

### 3. 現地研修の経験の 何を何につなげよう と思ったか

やはり物質的な貧しさが、精神的な貧しさになるかということ、日本の生徒たちに考えてもらいたいし、そこにつながるような授業を組み立てていきたい。

また、はだしの少年たち、ゴミ袋で作ったサッカーボール、頭にものを乗せて何キロも歩く女たちなど具体的な映像を通して、生徒たちに身近にマラウイの人々の生活を感じてもらいたい。

そして、アフリカの大地・自然の雄大さ・すばらしさをこれも映像を通して生徒たちに伝えたい。

### 4. JICAの開発援助事業に対する感想や提案

現地のJICA関係スタッフの方々は、真の援助とは何かを考え、そして実践されていた。その姿勢にはただただ頭が下がるばかりである。

たとえば灌漑技術支援にしても、現地の方々の手持ちの資材を使って開発できる方法を考案され、実践されそれが成果をあげ、現地の方の支持を得ていた。こうした地道な援助こそ真の援助と言えるのではないだろうか。

### 5. 研修（事前研修等を含む）に参加して良かったことや、より良くするための提案

すで書いてきたことに重複するので繰り返すことはしないが、本当に充実した2週間だった。健康もくずさず、みなさんと体験を共有できたことに感謝している。

### 6. その他全般を通じての感想・意見など

この研修を計画立案し、準備していただいたJICA関係者・NIED関係者の方々に御礼を申し上げます。

7. 訪問先ごとの気づきと築きなど

・「マナビノオト」に書き留めたことをふりかえり、まとめてみてください。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか/その他感想
7/30(金) リロングウェ →ゾンバ	ドマシ教員養成大学 視察	小さくなるまで使い続けるチョーク 大学でパソコン実習はできて学校では電気がなくて使えない。  →今後の総合的な学習（コミュニケーション・新発見）の授業等に生かしていく。
	小学校訪問と交流	こどもたちの歓迎のすごさ・笑顔・歌・劇・集まった人の数の多さ  →今後の総合的な学習（コミュニケーション・新発見）の授業等に生かしていく。
7/31(土) ゾンバ	ドマシ水産養殖プロジェクト視察	大溝さんの熱意・村の女たちが歌で歓迎してくれたこと。チャンボのランチ。  →今後の総合的な学習（コミュニケーション・新発見）の授業等に生かしていく。
8/1(日) ゾンバ→ リウオンデ	リウオンデ国立公園 ツアー（野生生物）	ほとんど動かないかば・バオバブの木・ぞうを見たこと・夕日のすばらしさ  →今後の総合的な学習（コミュニケーション・新発見）の授業等に生かしていく。
8/2(月) リウオンデ→ リロングウェ	小規模灌漑技術開発 調査（Tilime 村、 Tikorele 村、Mank- hamba 村視察	家泉さんのもの静かな中に秘めた熱意・村の人々の歓迎・新しい長靴をわれわれのために用意してくれたこと。  →今後の総合的な学習（コミュニケーション・新発見）の授業等に生かしていく。
8/3(火) リロングウェ →ロビ	現地青年海外協力隊 員との交流・情報交 換会（隊員との昼食 会を含む）	現地青年海外協力隊員のがやく眼・熱意・しっかりした考え  →今後の総合的な学習（コミュニケーション・新発見）の授業等に生かしていく。
	マーケット見学	色あざやかな布地・広場で楽しく酔っぱらっておどる男や女たち・村の人と親しげに会話する現地青年海外協力隊員  →今後の総合的な学習（コミュニケーション・新発見）の授業等に生かしていく。
	現地人宅へのホーム ステイ	ろうそくとランプの世界・心温まるもてなし・シマの夕食・薪でたきつけるかまど・炭のアイロン・たらいのお風呂（シャワー?）・子供たちの笑顔・チェワ語を教えていただく。  →今後の総合的な学習（コミュニケーション・新発見）の授業等に生かしていく。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか/その他感想
8/4(水) ロビ→ リロングウェ	ロビ園芸適正技術普及視察	現地青年海外協力隊員清水・山田・土屋隊員の熱意・現地の方の努力・笑顔  →今後の総合的な学習（コミュニケーション・新発見）の授業等に生かしていく。
	ロビ・野原隊員任地視察（理数科教師・チュワ中等学校）、生徒との交流	現地青年海外協力隊員野原隊員の熱意・学生寮の質素さ・楽しかった交流・歌のうまい生徒たち・教頭先生の熱意  →今後の総合的な学習（コミュニケーション・新発見）の授業等に生かしていく。
8/5(木) リロングウェ	ミサレ・峯隊員任地視察（理数科教師・中等学校）、生徒との交流	現地青年海外協力隊員峰・野元隊員の熱意・楽しかった交流・質問を熱心にしてくれた生徒・歌のうまい生徒たち・校長先生の熱意  →今後の総合的な学習（コミュニケーション・新発見）の授業等に生かしていく。
	保健行政アドバイザーとの情報交換  マラウイの教育行政等のレクチャー	笠原さんのデータ収集の熱意・熱心な説明・エイズ蔓延の原因についての考察・誠実に質問に答えてくださる姿勢  専門家中山さんの豊富な知識と正確な現状把握・誠実に質問に答えてくださる姿勢 →今後の総合的な学習（コミュニケーション・新発見）の授業等に生かしていく。
8/6(木) リロングウェ →マンゴチ	ムーア博物館見学 マンゴチ橋見学 現地伝統舞踊見学	マラウイの民族学的考察・さまざまな民俗・風習 日本の形ある援助のみごとな実例を目の当たりにする。 ムーア博物館見学で知ったことを実際の歌と踊りで鑑賞できたこと。 →今後の総合的な学習（コミュニケーション・新発見）の授業等に生かしていく。
8/7(土) ケープ マクレア→ リロングウェ	ケープマクレア散策	世界遺産に指定されるだけある見事な景観・時の流れをわすれるほどのゆったりした時間 →今後の総合的な学習（コミュニケーション・新発見）の授業等に生かしていく。
	JICA 現地関係者との懇親会（7/29のJICA マラウイ事務所訪問オリエンテーションを含む）	丁寧なアドバイス・さまざまな情報交換・あたたかい配慮あるもてなし →今後の総合的な学習（コミュニケーション・新発見）の授業等に生かしていく。
全体	全体を通じて、又は上記各訪問先以外の場面	充実した2週間・現地の方との触れ合い・参加者同士のチームワーク・準備・企画してくださったJICA・NIED関係者の方々への感謝  →今後の総合的な学習（コミュニケーション・新発見）の授業等に生かしていく。

## JICA教師海外研修 報告書

提出日	平成 16 年 8 月 24 日	訪問国	マラウイ共和国
学校名	光ヶ丘女子高等学校	氏名	田中千賀子

## 1-1. あなたやグループとしての現地研修への目的やねらい（主眼点・期待など）

- ・アフリカやマラウイについて、知識を増やし、体感する。
- ・マラウイの人や文化や価値観に触れ、日本の人や文化や価値観を見直す。特に「豊かさ」について考える。
- ・マラウイでの開発の現場やそこで活動する人に触れ、話を聞き、「開発」について考える。
- ・以上について、わかったこと、考えたことを日本でできるだけ多くの人に伝えるとともに、一緒に考える機会を持つ。できれば、そのことが人の役に立ち、人類共通の課題の解決につながるように機会の持ち方を工夫する。

## 1-2. その目的やねらいの達成度

- ・アフリカやマラウイに関する知識は増えた。また、限られた時間だったが、感じることもできた。
- ・「豊かさ」については掘り下げて考えることができた。「開発」についても自分なりに考えがまとまった。
- ・日本での活動についてはこれからなので、がんばりたい。

## 2-1. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

- ・まず、人々の表情の明るさや楽しそうな様子に圧倒されました。彼らの生きるパワーのようなものを感じました。その上彼らは礼儀正しく、お客さんはとても大切にしてくれました。
- ・マラウイの人の持つ「豊かさ」について考えました。まず、広大で豊かで厳しい自然の中で彼らはせこせこしません。細かいこと気にしだすと、人はパワーを失うと思います。そして、生活がシンプルだから色々なことを感じる時間が多いと思いました。ろうそくしかない生活を体験しましたが、(もちろんテレビもない)それほど不便ではなかったし、なんだか落ち着きました。また、娯楽が少ないと言うことは、人と交わることが大切な娯楽になり、また人とのかかわりが生きていくうえで必要不可欠なことが日本などよりはつきりしているから、人間関係が豊かです。助け合いの精神も日本より発達していると思います。特に親戚間の絆が強いです。「何があっても生きてはいける」という感覚は人間を安心させると思います。それが、あくせく働く人を減らし、マラウイの経済的な貧しさにもつながっているのかもしれませんが、心の余裕、豊かさにもつながっているのかな、と思いました。また、マラウイの人は信心深い(キリスト教徒が多い)といえます。このことも彼らの心の余裕につながっていると思います。
- ・JICA マラウイ事務所長が、「もののない豊かさ」について話してくれました。ものがないからちょっとしたものでもあるときに感激し、感謝できると聞いて、妙に納得しました。こんな感じ方ができることも豊かさでしょう。また、ドライラマが書いていますが、人はものを持てば持つほど失うことをおそれて不安になると言うことです。このような不安が少ないことも「もののない豊かさ」でしょうか。
- ・マラウイの人は、便利なものが入ってきて、それを手に入れるために無理する人が少ないようです。保守

的ともいえませんが、現在の生活にそれなりに満足し、自分たちのあり方に自信を持っているとも考えられます。「足りることを知っている」というのはすごいことで、マラウイ文化の豊かさだと思います。

- ・マラウイ人は「人がよい」とみんなが言うし、私も思いました。そして争いを好みません。「平和で穏やか、」これもマラウイの豊かさだと思います。
- ・マラウイでの朝は、いつもとても贅沢でした。朝日の昇ってくる様子に加え、鳥の音がものすごくきれいでした。マラウイは自然が豊かで、気持ちも豊かにしてくれます。
- ・マラウイ文化の豊かでないところの一番目は、「男尊女卑」の考え方だと思います。女性の地位の低さがさまざまな社会問題、たとえばエイズの蔓延につながっています。この点は変わっていくとよいと思います。
- ・「開発」について考えたことは、人権を侵害する状況を変えていくこと、例えば男尊女卑の考えは間違っていることを啓蒙していくことなどを、「開発」と考えるべきではないかと言うことです。
- ・一方で、経済のあり方をいわゆる先進国の方向に持っていくことは真の意味での「開発」なのだろうかと思いました。現在マラウイの国家予算の4割は海外からの援助だと言います。そして、マラウイでしばしば「援助産業」と言う言葉を聞きましたが、援助のほとんどは限られた一部の人たちの利益になっているということです。一部の人々の生活を変えるために、多くの人々の昔からの安定した生活が壊されている状況もあります。これらの変化を「開発」と、またこのような援助を「国際協力」と言ってよいのでしょうか。「国際協力」はあくまでその国の人権侵害の改善に焦点を当てるべきであり、国の経済の進歩に焦点を当てる援助は、援助を受ける国の(そして援助する国の)1部の人々の利益につながりやすく、長い目で見るとその国の多数の人々に不利益を与えることが多いのではないかと思います。

## 2-2. 参加者・スタッフから学んだこと (気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど)

- ・参加者の人たちはみんなパワフルで、さっぱりしていて、芸達者な人たちでした。一緒にいて楽しかったです。また、日々の生活や話し合いを通して、自分自身の視点が広がったと思います。これからもこのつながりが続いて、国際理解教育の広まりにも結びついていくとよいと思います。
- ・マラウイで出会った JICA 関係者の方々は、本当に情熱的でイキイキしている方が多かったです。マラウイの人の中に飛び込んで活動をしている方が多く、大変なことがたくさんあると言いながらも現地の人に感謝され、生きがいを感じているようでした。国際協力のあり方に疑問を持ちながらも「できることをやるしかない」と言うのが彼らの共通の思いだったような気がします。結局マラウイのことを本当に変えていけるのは、マラウイの人たちだと思います。マラウイ人のリーダーが成長して国を作っていく手助けをするのも国際協力なのかな、と思いました。

## 3. 現地研修の経験の 何を何につなげよう と思ったか

- ・私のマラウイ体験やマラウイの人とのつながりを使って、「マラウイを身近に感じる人」を増やす。
- ・マラウイと日本の関わりを考え、(必要なら知識を伝達)日本の誰もがマラウイと関わっていると言う事実について知っている人を増やす。
- ・マラウイと日本をいろいろな面で比較して「人が幸せに暮らすための豊かさ」について考える。
- ・マラウイに対する日本の援助のあり方を通して「開発や援助のあり方」について考える。

#### 4. JICAの開発援助事業に対する感想や提案

まず、現場で矛盾を感じながらがんばっているスタッフの方々はずごとと思いました。援助事業はマラウイの人のためになっていると思うのですが、1部の人の利益になっていたり、そのために現地の多くの人が長い目で見て不利益を受けることもあると思うので、長期的に見てみんなの利益になるような援助や開発を続けていってほしいと思います。マラウイの上層にいる人たちの汚職はひどいと何度も聞いたのですが、それをやめさせるような援助のあり方はないのでしょうか。また、マラウイを自分たちの手でよくしたいと思う若者を支援する援助や、女性の地位の向上につながる援助がもっとあるとよいと思いました。

#### 5. 研修（事前研修等を含む）に参加して良かったことや、より良くするための提案

- ・マラウイに行けたこと自体が学びの多いよい研修でした。マラウイでの行程も多岐にわたるもので、準備してくださった方に本当に感謝しています。
- ・マラウイに行く10日くらい前の研修で協力隊員の方のお話や、過去に参加した濱田さんの実践のお話が聞けたことはよかったです。
- ・10日くらい前の研修で、もう少しグループのメンバー間でのフリーな話し合いができると準備がもっとしやすかったかな、と思います。また、現地での予定がどの程度決まっているのか、など現地での活動についてもう少し詳しい話が聞きたかったです。
- ・事前研修、現地でのワークショップを含めて、いつも盛りだくさんで、多様な視点で物事を考えることができたのはよかったです。反面、考える時間がいつも短くて大変でした。もう少し考える内容を絞ってもらえると学びが深まったかな、とも思います。

#### 6. その他全般を通じての感想・意見など

貴重な体験ができました。本当にありがとうございました！また、アフリカ行きたいです。

#### 7. 訪問先ごとの気づきと築きなど

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか/その他感想
7/30(金) リロングウェ →ゾンバ	ドマン教員養成大学 視察	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中等学校の先生の7割(CRSSは9割)が無資格。新卒の教育だけでなくすでに教えている先生に資格を取らせるプログラムもある。ほとんど国の費用で学べ、寮で生活費もいらない。</li> <li>・国が教えた内容はかなり高度だが生徒の実情に合わない。</li> <li>・多くの生徒は学校に来る意義を認められない(仕事につながらないで)。</li> <li>・教員のモチベーションも低い。(給料安い)</li> </ul>
	小学校訪問と交流	<ul style="list-style-type: none"> <li>・NGOが入ったことで、教育を職を得る手段と考えていたのが、教育は生活を充実させるために大切だ、という意識が育った。</li> <li>・カリキュラムに実生活に役立つ内容を組み込んでいる。(エイズ防止のための劇や音楽をつくるなど)適切なカリキュラムは生徒の役に立ち学習意欲を高める。</li> <li>・学校が地域の大人の活性化につながり、地域の問題の解決に役立っているようだった。</li> </ul> <p>→学校のあり方と学校の持つ力について考える。</p>

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか/その他感想
7/31(土) ゾンバ	ドマシ水産養殖プロジェクト視察	<ul style="list-style-type: none"> <li>・在来種の中に強い外来種を入れると生態系が崩れる。</li> <li>・「援助産業」になっている現状とその悪影響を知った。</li> </ul> <p>→異文化の良さを認めることは大切だが、その受容については慎重に行うべき。「国際協力」「援助」はその国のことを考え、長い目で見て慎重に行うべきだ。しかし、現状は・・・。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大溝さん曰く、「プロジェクトに取り組んでいるのは女性がほとんど。よく働くし人間的にも尊敬できる。(謙虚さ、誠実さ、頑張りなど)関わっていて学ぶものが多い。」大溝さんも村の人に尊敬されていた。男性はふらふらして働かない人が多い。子供は多く学校に入っていない様子。</li> </ul> <p>→尊敬される要素、人と関わる上で大切なこと、人として大切なこと。</p>
8/1(日) ゾンバ→ リウオンデ	リウオンデ国立公園ツアー (野生生物)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・野生の動物が自然の中でそのまま暮らしている感じ。非常につやのよい、かっこいい動物が多い。日本の動物園で見るとはずいぶん違う。船で川の魚を取っている人がたくさんいた。</li> </ul> <p>→自然・野生の強さ、すばらしさ、厳しさ。自然と共存する人。</p>
8/2(月) リウオンデ→ リロングウェ	小規模灌漑技術開発調査 (Tilime 村、Tikorele 村視察)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・案内してくれた村のリーダーの方の自信と誇りを持った話し方が印象的。家泉さんが色々アイデアを出すと、村の人が工夫をして進めていく。以前は「乾季に作物を作るという考えがなかった。」</li> </ul> <p>→新しい視点は大切。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・よりよい生活が見えればがんばる。でもすごくがんばる人は少ないらしい。</li> </ul> <p>→がんばりすぎ、とりすぎはよくないという価値観があるのかな? (「とりすぎはよくない」という価値観は自然と共存するには必要)</p>
8/3(火) リロングウェ →ロビ	現地青年海外協力隊員との交流・情報交換会 (隊員との昼食会を含む)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・野原さん(協力隊員教師)と松嶋さん(JICA 職員)にきいたマラウイの価値観・文化:「目上の人を大切に」「相手を尊敬できなければ自分も尊敬されない」「比べられる機会が少ないせいか、競争心はあまり強くないかも。人にもよるが」「嫉妬社会。人よりたくさん持っているを取られたりする。→持つて人は分け与えなくてはならないので、がんばらなくても暮らしていける。足の引っ張り合い」「責任を追及しない。失敗はみんなで擁護」「国、地域はあてにならない。親戚を頼る」「家族の絆が強い」「子供が手伝いをよくする」「子供が多いのでほおっておかれるが、愛されている」「よいことも悪いことも神が決めたこと、と深刻にならない」「心にゆとりがあり、優しい」「何がなくても工夫して暮らしている」「コネ社会(政府のレベルでも)」「人とかかわりを大切にする」「あせらない、時間を守らない(人付き合いのほうが大切)」「たくましい」「ものはなくても楽しんで暮らしている」</li> </ul>
	マーケット見学	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日常生活に必要なものはある感じ。吹っかけることはあまりないそうだ。リロングウェのマーケットよりは落ち着いている。お酒を飲んで楽しそうに踊っている人が何人かいた。洋服などは汚れていても気にせず売っていた。</li> </ul>

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか/その他感想
8/3(火) リロングウェ →ロビ	現地人宅へのホーム ステイ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・精一杯もてなしてくれた。電気がない生活も味がある。</li> <li>・物を入れるスペース、居間、寝室、客用寝室、台所、風呂場、トイレ(壊れていて、外のを使った)のある家だった。夕方の料理は外でやっていた。星がめちゃきれい。シマの作り方習った。</li> <li>・パパさんが威張っている感じ。ママさんの体調が悪くてあまり話ができず残念だった。子供(2歳)は、私を見て泣いていた。</li> <li>・朝、ろうそくの火で準備。鳥の声がして贅沢な感じ。</li> <li>・パパさん曰く、「農村にいる貧しい人たちは怠け者だ。王様のように働いて奴隷のように暮らすか、奴隷のように働いて王様のように暮らすかだが、自分は後者を選ぶ。」</li> </ul> <p>→シンプルな生活はいいなあ。1週間くらいいたらもっと色々感じてわかったと思う。今の私には体力的に大変かもしれないが、アフリカに生まれ育っていたら、快適な生活だと思った。</p>
	ロビ園芸適正技術普及視察	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マラウイでは味より大きさが大切。日本の農家は、味もよく大きいものを育てるからすごい。</li> <li>・見て納得するとやってみようとする。まずよさを証明すること大切。やりたいという人にはアドバイスをする。何を作るかなどは、市場などを考えて決める。(みんな経営者だ)</li> <li>・(たい肥作り)やる、と言ってやってないこともしばしば。やりかけてやめてしまうグループも多い。あせらず付き合う。</li> <li>・みんなでやっている畑は学校のようなもの。自分の畑は別にある。(このグループも女性が多かった。)</li> </ul>
8/4(水) ロビ→ リロングウェ	ロビ・野原隊員任地視察(理数科教師・チュワ中等学校)、生徒との交流	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校はデンマークの寄付でできた建物。いろんなところからの寄付で教科書や机を入れた。教員の給料は国から出るがそれ以外の支援はなく、授業料でまかなう。授業は40分9コマ。3時間ごとに10分の休憩で8時から14:20まで。昼食時間はない。2時間かけて歩いてくる子もいる。2年と4年はテストがあるので強制的に寮生活。</li> <li>・一クラス50人とか100人とか。教科書がないので先生が黒板に問題を書き生徒はそれを写すので時間がかかる。生徒は一生懸命授業を受けていた。先生の質問に立って手を上げて答える、みんなで答える、という時間をたくさんとっていた。授業の内容は簡単だった。礼儀正しい。</li> <li>・地理の授業をした。アフリカについてよく知っていた。時差や緯度経度についても知っていた。一生懸命参加してくれた。日本の遊び紹介は盛り上がった。とても楽しかった。</li> <li>・最後に歌を歌ってくれた。めちゃくちゃうまい。</li> </ul> <p>→生徒はパワーがある。元気ももらった。</p>
8/5(木) リロングウェ	ミサレ・峯隊員任地視察(理数科教師・中等学校)、生徒との交流	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ロビの学校の生徒よりも野性的な感じ。バレーを一緒にやった。ルールは守らないが、運動能力の高い子が多かった。英語で色々話しかけてくれた。ペンパルがほしいと言っていたが、住所を聞けなかった。</li> <li>・またまた日本の遊び。今回は70名くらいを対象にしたので大変だった。水野さんの手品はすぐに見破られた。目がいい!きっと頭もいいのだろう。折り紙は紙自体が珍しいようだった。</li> </ul>

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか/その他感想
<p>8/5(木) リロングウェ</p>	<p>ミサレ・峯隊員任地視察 (理数科教師・中等学校)、生徒との交流</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・峰さん(協力隊員)が言うに、将来の夢は医者、看護婦、ドライバーなど色々あるが、ほとんどの生徒は農業をやることになる。(私が聞いた子はまだわからないといっていた。)また政府の学校と CRSS の設備や教員の差は大きいということだった。部活でバレーを教えている。</li> <li>・時間に関してマラウイはとても柔軟。行ってから予定が決まった。</li> <li>・授業を見せてもらった。今日は生徒は静かにしていた。ぼけっとしてる子も結構いた。うるさい時もあるが先生はあまり注意しないらしい。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保健行政アドバイザーとの情報交換</li> <li>・中山さんのお話</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マラウイのエイズの問題について教えてもらった。女性の地位の低さがエイズの蔓延に関係しているとマラウイの関係者はみんな言うとのこと。</li> <li>・援助漬けといわれているが、歴史と現状を見れば、今のマラウイの人の対応は賢いと思う。たとえば加工をするなどして、農業関係の産業が伸びれば経済発展はありえる。(それ以外の産業は今のところ難しいだろう。資源もないし。)ただ、現在のマラウイを見て「豊かだ」と思う面はたくさんあるし、このままではいけないのか、と思うこともある。援助が永遠に続くわけではないので自立できればそのほうがよいに決まっているが、国政のレベルでその意識が薄いように思う。</li> <li>・マラウイの一般の人が自分の国をどのようにしたいかは、多分日々の生活で精一杯でわからないだろう。</li> <li>・海外に出ってしまうブレインは多い。これはアフリカ全般のこと。</li> <li>→今のマラウイの人にとって物をもらうことは自然なことでも悪いことでも恥ずかしいことでもないのではないか。問題はいつかもらえなくなるかもしれないことだが、そのこともマラウイの人にとってはあまり問題ではないのかもしれない。(何とかなるのかも)</li> <li>→女性の地位の低いことはマラウイ文化の弱い面だと思う。「文化に優劣はない」と言うのは間違っていると思った。マラウイで女性の地位が上がればそのほうが優れた文化になると思う。「外国の文化を優劣という視点で考えることに無理がある」と思う。</li> </ul>
<p>8/6(木) リロングウェ →ケープ マクレア</p>	<p>ムーア博物館見学  JICA の関わった橋の見学 (マンゴチ)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・チェワ、ウンゴニ、ヤオの3つん部族の習慣が写真で見れてよかった。現在でもローカルでは続いていると言うことでびっくりした。</li> <li>・「戦う部族」という印象だが、現在はずいぶん変わったんだな、と思った。</li> <li>・日本の ODA で作った橋(50 クワッチャのお札についてる)を見た。たくさんの人が使っていたのでよかった。</li> </ul>
<p>8/7(土) ケープ マクレア→ リロングウェ</p>	<p>ケープマクレア散策</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・きれいな水だ。泳いでる人、洗濯してる人がたくさんいたが、住血吸虫大丈夫?</li> <li>・ビジターセンターが環境教育の拠点になっていることに驚いた。学生が毎週来て勉強しているということ。人間が環境を破壊するという図は面白かった。また、現地の人意見を入れた開発をしなくてはならないという図もあり感心した。木の切りすぎが環境破壊につながっているので代用品も作っていた。</li> <li>→環境教育は一般的にどの程度広まっているのかな?</li> </ul>

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか/その他感想
	<p>JICA 現地関係者との懇親会 (7/29 の JICA マラウイ事務所訪問オリエンテーションを含む)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多くの人が集まってくださって、うれしかったし感謝。</li> <li>・土でできた家は雨季になると流れたり、崩れたりする。でも変えようとしないうこと。</li> <li>・中山さんも家泉さんもコンサルからの派遣だった。大溝さんは企業の人だ。</li> <li>・ケニア人と比べるとマラウイ人は人がよくてのんき。</li> <li>・男が働かないのは昔は兵隊だったから。バンツー系はみんなそう。(この辺の部族はみんなバンツー、南アはズールーが多い)</li> </ul> <p>→マラウイやアフリカについての知識をもっと増やす。</p>
<p>全体</p>	<p>全体を通じて、又は上記各訪問先以外の場面</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どこまで行っても同じ景色が続き、どこを見ても人家があることには驚いた。</li> <li>・夕日がいつもとてもきれいだった。</li> <li>・家畜が放し飼いで、とてもつやがよくて元気だった。きっと彼らは幸せだろう。(でもいつ食べられるかわからない?)</li> <li>・走っている最中に道路の建設をしていた。EU がやっているとのこと。急に道路が一本通るだけで、周囲の生活は一変すると思った。ドマシのドライバーさんは、子どもの頃あの地域はブッシュだけだったが、道路ができて市場ができた。市場を作ったり、物を買うためにみんな以前より働く様になったと言っていた。ドライバーさんはそれは OK だと言っていた。</li> <li>・歩いている人がたくさんいた。1~2 時間は平気らしい。</li> </ul> <p>→石鹸を知ってしまったら、ない生活には戻れない。便利を知ってしまったらそれがほしくなる。でもそれが行き過ぎたら今の日本のように余裕のない生活が待っている。マラウイの人は何を選択して、どこでとまるのかな。日本人の今のレベルはきっと人として不幸なレベルなんだろう。地球にも優しくないし。マラウイの人は日本人のようにはならないと思う。本当に大切なものを知っているのか、自然がそれを阻むからかはわかりませんが。</p>

## JICA教師海外研修 報告書

提出日	平成16年8月24日	訪問国	マラウイ共和国
学校名	静岡県立富士養護学校	氏名	田邊 愉美子

## 1-1. あなたやグループとしての現地研修への目的やねらい（主眼点・期待など）

- 1) 多くの現地の方々と話をする中で、マラウイの人々の生き方、考え方、良いところなどを学ぶ。
- 2) JICAの事務所の方々、National Staff、専門家、調査団、協力隊員からマラウイの抱える諸問題や課題を知り、開発援助とは何かを考える。
- 3) 学校を訪問し、勉強する環境、カリキュラム、生徒達の夢、問題点などを知る。マラウイの生徒達の良さを知り、日本の生徒達に伝えられるようにする。
- 4) マラウイと日本を比較することで、自国を振り返る機会とする。

## 1-2. その目的やねらいの達成度

現地研修においては、学校視察や農村・養殖場視察・ホームステイなどで現地の方々と話す機会を多く設定していただき、多くの事が学べた。また知識豊富な National Staff が常に研修に同行し、疑問に思ったこと、マラウイの国事情を丁寧に説明していただき、本当に有意義なものになった。現地の人々と一緒に汗を流す協力隊員の方々、現地の教育事情に詳しい中山さん、医療事情に詳しい笠原さん、農村の生活が自立して豊かになるように活動している大溝さんと家泉さんからの話は、再度開発・国際理解教育とは何か考える良い機会となり、達成度の高い研修になった。（7 訪問先ごとの気づきと築きなど 参照）

## 2-1. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

「マラウイは物質的には貧しい国であるかもしれないが、人々は温かい心を持っており精神的には豊かな国である」というのがマラウイに行き行って気付いたことである。そう感じた場面は・・・

- ① ホームステイ先でとても温かい歓迎を受けた。家族の繋がりが強く、家の仕事をそれぞれが分担し、お互いが協力し合って大家族が成り立っているという場面が多く見られた。
- ② 学校には教科書も電気も無く、1クラスに80人も生徒がいるという決して良いとは言えない環境であるが、「学びたい」という気持ちが強く授業への集中力も優れている。目が輝いていて生き生きしている。
- ③ 農村へ視察に行くと、女性達が歓迎の歌を歌ってくれた。養殖場を女性達だけで作るなど重労働であるにも関わらず、笑顔で前向きに行っている。
- ④ エイズなどで若くして亡くなった方の子供は親戚が引き取って育てる。食事を与える、子供の面倒を見るということは当然のこととして考えられている。（National Staff より）

\*これらの場面を見てこの温かい心はマラウイにとっては非常に大切なことであると感じるとともに、日本では競争社会の中で失いつつある物ではないかと感じた。マラウイでこのような温かい心を持った人々を知ることができ、とても嬉しかった。

## 2-2. 参加者・スタッフから学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

参加者全員が「マラウイについて学びたい」「学校でここでの経験を活かしたい」という思いが強く、情報交換会などでは私とは違った視点での質問が出たり、移動などのちょっとした時間でもそれぞれが学んだことの情報交換ができたりするなど参加者やスタッフに恵まれた研修であったことが嬉しかったことだ。これからも多くのことを学べるこの仲間を大切にしていきたい。

## 3. 現地研修の経験の何を何につなげようと思ったか

### 1) 「開発援助」から学んだ「自立」（養護学校・高校にて）

日本の子供達にも「自立」はとても大切なことである。子供達が成長していく過程で「手助けしなければいけない場面」と「自分の力でやらせる場面」を考え、「自立」を目指す指導をしていきたい。

### 2) 「(物質的に) 貧しい=かわいそう、物をあげたい」という概念を取り除く（高校の英語教育にて）

英語の教科書の中には近年開発教育に関する内容が取り上げられているが、物資や資金の援助をすることが開発援助と捉えている生徒も多い。しかし、物資・資金援助の仕方を間違えると「他力本願」的な考え方がその国に生まれ、一時的な援助にしかならない上に自立しようという力が無くなっていくことを理解させたい。また協力隊員のしている活動の意義を考えさせたい。

### 3) 異文化体験学習をする機会を作る（養護学校にて）

養護学校の生徒達は比較的活動する範囲が狭いことが多い。マラウイで撮った写真を使って、自分たちが住んでいる国と全く違う国も世界にはあることを伝えたい。またマラウイの音楽を楽しんだり、マラウイのお金を使ってお土産を買ってみる買い物学習なども取り入れたりし、視野を広げたい。授業をやっている中で疑問に思ったことはe-mailを使って聞いてみるなどの授業も行いたいと思っている。

### 4) マラウイの子供達の持っている豊かな心を育てたい

決して良いとは言えない学校環境の中で、マラウイの生徒達は目を輝かせながら一生懸命学んでいる。一方、今の日本の学校の中では「不登校」や「いじめ」などの様々な違う問題を抱えている。また学校に行く意味を見いだせない生徒も多い。なぜこのような状況が起きてしまうのか考え直し、人（相手）の心と自分自身を大切にするような教育をしていきたい。

## 4. JICAの開発援助事業に対する感想や提案

JICAの開発援助は、開発途上国の社会・経済が自立的・持続的に発展できるような人材の育成を行っていたと思う。マラウイでお会いした専門家・調査団・協力隊員がしていたことは、現地の生活をよく見て考え、人々のニーズにあった技術援助であり、決して押しつけではなく自主的に継続して取り組めるような配慮が多く見られたと思う。一方、大溝さんや中山さんから「援助=ビジネス」になっている現状（例：JICAがマラウイに学校を建てるにしても日本の業者を通さなければならない→日本にとって損にならないような援助を行う）も聞いた。「援助=ビジネス」という言葉は、「援助とは見返りや利益を求めないもの」と勝手に解釈していた私にとっては、とても衝撃的な言葉であった。日本の業者を通して、それが日本の利益だけを追求せず、必ずマラウイの人々の望んでいる生活に合った援助であってほしいと思う。

また多くの協力隊員が帰国後の仕事の心配をしている現状も知った。アメリカなどでは様々な経験をした人は貴重な存在として受け入れられるが、日本ではそのような社会の体制が整っておらずまだまだ保守

的である。マラウイで会った協力隊員達は、広い視野と厳しい環境の中でも頑張り抜ける強い意志を持った方ばかりで、帰国後に希望するような職種に就ける体制を日本も作っていくべきだと感じた。

5. 研修（事前研修等を含む）に参加して良かったことや、より良くするための提案

海外研修前の開発教育指導者研修に参加することで、多様な価値観を受け入れよう、マラウイの人々と話をする事によって世界全体で取り組まなければならない課題を見いだして自分がすべきことは何か考えよう、そんな目的を持つことができたことがとてもよかったと思う。海外研修では実際に自分の目でマラウイの抱えている諸問題や JICA が行っている援助を見ることができ、自分自身の「援助」という言葉への考え方が変わり、生徒へ伝えていきたいこと、これから勉強していかなければならないことが分かってきたような気がする。また多くの素晴らしい方々との繋がりを作ることができたことも、この研修に参加してよかったと思う。

事前研修については、数日前に日程や持ち物が分かり、準備が不十分になってしまったこともあったのでもう少し早くやっていただけるとよかった。（個人でマラウイについての入手できる情報量は少ないので・・・）

6. その他全般を通じての感想・意見など

全般的に非常に有意義な研修だった。情報交換会の中でエイズ孤児院や養護学校の話が出てきてまだまだ見たいところや話を聞きたいところはたくさんあったが、2週間という限られた期間の中で本当に考えられたことが多かった。海外研修期間中に「何を何につなげるか」ということを話したが、正直なところ、頭の整理ができておらず、どう繋げていくかははっきり言えない。しかし自分の中での開発教育・国際理解教育への考え方が変わるとともに、生徒への接し方が変わっていけば違った授業や指導の仕方ができたらと思う。

7. 訪問先ごとの気づきと築きなど

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか/その他感想
7/30(金) リロング ウェ →ゾンバ	ドマシ教員 養成大学視 察	大学には日本を始め、カナダ、アメリカなど様々な支援団体が入っていた。小学校は無償になったが、教員の数は不足しており、無資格教員も多いようである。そのため教員養成大学の必要性は強く感じた。その反面、中山さんが「国の予算の40%を外国からの援助に頼っているマラウイが自立するには教育が一番必要であるのに、その教育を他国が援助している。本当は教育こそ自分の国でできるようにならなければならない。」と話していた。大学への支援の必要性を感じると同時に、どこまで他国が携わっていくべきかということも考えていかなければならないと感じた。
	小学校訪問 と交流	まず私たちを迎えてくれた子供たちの笑顔・輝く瞳に感激した。最初に見せていただいた課外活動は fish basket の作り方だった。作った fish basket を使って魚を採り、その魚を売って学校の資金にする。この活動は実用的であり、自立にもつながりマラウイの子供たちにとっていい活動であると感じた。次に見せてくれた歌・ダンスはいずれも「HIV 感染を防ごう」というメッセージが含まれているものであった。日本ではエイズに関する教育となると「HIV 感染者を差別しないように」という教育が主となるが、マラウイでは感染者が4割と言われているほど深刻な国であり、小学校・中等学校においてもその教育不可欠であるということをつくづく感じた。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか/その他感想
7/30(金) リロング ウェ →ゾンバ	小学校訪問 と交流	<p>帰りのバスに乗り込んだ時、窓の外から「Give money!」と数人の子供たちが手を伸ばして叫んだ。協力隊の方によると、マラウイ人の頭の中にも「外国人=お金」という概念があるそうだ。私たちを迎えてくれたあの子供たちの笑顔の裏にもし「援助をくれるために来たのかも?」という思いがあるとしたら・・・そう考えると複雑な気持ちになった。</p>
7/31(土) ゾンバ	ドマン水産 養殖プロジ ェクト視察	<p>大溝さんから本当に考えさせられる話をたくさん聞いた。マラウイでは援助そのものが職業になっていること、抜け出せない poverty trap があること、品種改良のトウモロコシを入れたことで苦しんだ農家の話、プロジェクトがあっても研究室で行われているだけで現場に届いていないものも多いこと、飢餓・エイズが深刻であること・・・。「本当の援助とは何か?」ということのを改めて考える機会となった。</p> <p>水産養殖プロジェクト視察では養殖支援をして成功した CHIDOTCH Village. MPASKA Village の2つの村を見学させていただいた。村に着くと女性たちの明るく響く歌声と子供たちの笑顔に歓迎された。子供たちに向かって大溝さんは「お前たち将来がないんだよな。」と日本語で言った。歩くとお尻が見えるぼろぼろのズボンをはいた少年、赤ちゃんをおぶっている少女、ペットボトルをもらって無邪気に喜んで走り回っている子供。その子達を見て「せめてこの子供たちが元気に自分で働いて食べていけるよう成長して欲しい。」そう願った。</p> <p>成功した養殖場を見せていただき大溝さんから「このため池1つ分の「魚を売ると 6000MK (日本円で約 6000 円) のお金が手に入る。しかし、このお金全部が自分のものになるわけではない、これをつぎの稚魚を買うお金や餌代にしていかなければならないということを知ってもらうのに本当に苦労した。日本の教育を受けていれば当たり前前のごとに思えるんですがね。」ということ聞いた。継続的にこの村が養殖を成功させ、自立していくようになるためにも教育は必要であると感じた。大溝さんの努力もあり、今は村の中でリーダーも決まっておき、自分たちでお金の管理ができていそうである。そして大溝さんが初めて来た当初よりも村は豊かになり、それを見た隣村の人たちが「自分たちもやってみよう。」と言い、自分たちの「養殖場を作り始めたそうである。その現場を見せていただいたが、土木作業を女性のみで行っており、中には赤ちゃんを背中に負ぶって重い土砂を運んでいる女性もいた。女性たちは皆未亡人で(夫は本当に亡くなってしまったか、他の村に行ってしまったかでないそうだ)農作業と家事の他にこの養殖の仕事をやっているという。この作業をやっている最中も明るく歌声が響き渡り、一生懸命働いている女性達の姿を見ていると涙が出そうになった。</p> <p>養殖場を作ることの利点は現金を得ること意外にも、主食であるトウモロコシの畑に撒く水を確保できるという点にもあるそうだ。養殖場が出来る前は、乾期にトウモロコシ畑はカラカラだったそうだが、今は緑で潤っていた。現地のニーズを知った上での支援であるということが本当によく分かる現場であった。「援助とは現場のニーズをよく分かり、継続的にその村が自分達の力だけでその事業を行っていける力をつけること。物質的な援助は行わず、現地にあるものをできるだけ使うこと。」ではないかと考えた。</p>
8/1(日) ゾンバ→ リウオン デ	リウオンデ 国立公園ツ アー(野生 生物)	<p>教員の平均月収が 4000MK (日本円で約 4000 円)。国立公園の入場料が 1人\$ 5 (約 600 円)。この相場を考えるとマラウイ人のほとんどはこの国立公園には訪れたことがないのではないかと考えた。実際行ってみると、私たちのバス意外には白人の団体、個人旅行者、協力隊員しか見なかったような気がする。普通国立公園と言えば、国民</p>

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか/その他感想
8/1(日) ゾンバー リウオン デ	リウオンデ 国立公園ツ アー (野生 生物)	のための公園であるが、ここではお金を落としてくれる外国人のための公園であるようだ。ここには野生のカバや象など、子供たちにとって魅力のある動物も多いのに、マラウイの子供達が生かすにはおそろしく入ることの出来ない場所であろう。マラウイの子供たちは自分の国に住んでいる野生動物のことをどれだけ知っているのだろうか？どれくらいの子供達が見たことがあるのだろうか？疑問に思いながら公園を去った。
8/2(月) リウオン デ→リロ ングウェ	小規模灌漑 技術開発調 査 (Tilime 村、 Tikorele 村、 Mank- hamba 村 視察	<p>家泉さんは小規模灌漑技術を教える時には「山から水源を引いてくると乾期にも農作物ができるようになる。」ということを農民に説明し、決して押し付けないようだ。そう説明した後、実際に活動して成功した村を視察させていただいた。そこで一番驚いたのはすべて村にある材料で施設を作っていることだった。「少しは援助物資を使っているだろう。」と思ったが全く使われていない。</p> <p>そして村の人々は自分たちの作った灌漑施設を私達に見てもらい誇らしげに見えた。自分たちの持っていなかったアイディアは家泉さんからもらったが、実際に作業を行ったのは自分たちである。その作業はすべて手作業であり、その村すべてのトウモロコシ畑を潤すのは相当な労働時間を費やしたのではないかと思う。しかしその努力が実ってその村のトウモロコシは乾期にもかかわらず緑で潤っている。家泉さんが入って今年で2年目だが、昨年この方法でうまくいたので、今年は昨年よりも早く種植えをしており、乾期の間に2回作ろうという気持ちが明らかに現れていると言うようだ。自分達の成果が目に見えることが自信につながり、メンタル面でのサポートにもなっているのではないかと思う。</p>
8/3(火) リロング ウェ →ロビ	現地青年海 外協力隊員 との交流・ 情報交換会 (隊員との 昼食会を含 む)	<p>現地青年海外協力隊員達との交流会では、それまでマラウイを視察させていただいて疑問に思ったことが聞けるとてもいい機会だった。</p> <p>協力隊員も私達も疑問に思ったことは「男性がなぜ働かないのか？」ということだ。いくつかの農村をそれまで見てきたが、男性が働いていた村は少ない。山田さん(シニア隊員)は男性がお酒を飲み、さらに悪影響を与えていることを指摘する。実際にロビの市場を見学した時、市場から少し離れた竹で出来た囲いの中で、男性たちが朝からお酒を飲んでいるという現場を見た。女性達がたくさんの子供を抱えながら、家事や農業をこなしているのに、男性がこのような状況であるのは理解しがたいことだった。「お金があれば子供の教育に使いたいと思うのがお母さん。お金があればお酒に使いたいというのがお父さん。」だそうだ。JICAの事務所の方が「おそらくこの状況は政府関係の重要ポストに優秀な女性が入らない限りは変わっていかないし、すぐに改善はされないだろう。」と話していたのを思い出した。男性のこの状況が改善されればマラウイもずいぶん変わっていくのではないかと思う。</p> <p>また「ねたみ社会」に関する話を聞いた。例えばある家が素敵な倉庫を作るとそれを見てねたんだ人が夜中に切りに来る、トマトのビニール栽培がうまくいっているのを見てねたんだ人がビニールハウスを切り刻みに来るなど、特別な立場に立つ人の足を引っ張ることが日常であるようだ。これでは競争社会はなくなり、マラウイの発展の妨げにも繋がるかもしれない。しかし、このような考え方があるから親類同士助け合って子供を育てていくというような考え方がうまれるのかもしれない。(National Staffのマンダさんに、「大人の平均寿命が38歳という短い、孤児になった子供達はどうなるのか？」と聞くと、「だいたい親戚の人が引き取る。子供達に食べ物を与えることは簡単なこと。」という答えが返ってきた。)競争社会が極端になり、自殺者が後をたたない日本とみな同じ立場でいようとすることがために発展が遅くなっているマラウイ。どちらの社会が幸せなのかとふと考えた。</p>

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか/その他感想
	<p>現地青年海外協力隊員との交流・情報交換会 (隊員との昼食会を含む)</p>	<p>協力隊員達が苦勞していることの1つは、説明だけではなかなか分かってもらえないことだそう。堆肥の作り方を教えても口ではやると言うが、次に行くとやっていないことも多く、「何でやってないの?」と怒ってやらせなければならぬ場面もあるようだ。農業は教えてすぐに成果が出るわけではなく、最低でも1年は必要だ。成果が直接見えればマラウイの人も動くと言うが、その1年を人々に分かってもらうように頑張っている隊員の努力は計り知れない。「何年か一緒に働いている人にも未だに Give me money と言われることもある。最初はこの言葉を聞くと悲しくなってきた。でも慣れてきたこともあるけど、最近は悪気なくそう言うのを見て挨拶代わりに思えてきた。」と山田さんは言っていた。私よりも若い彼女が、何年もマラウイに暮らして頑張っていく中でいろいろな葛藤と戦いながらも頑張っている姿を見て心から応援したくなった。</p> <p>上記以外にも勉強になる話をたくさん聞いた。高校教員時代、協力隊員になりたいという生徒がいたので是非協力隊員の頑張りを伝えたいと思う。</p>
<p>8/3(火) リロング ウェ →ロビ</p>	<p>マーケット 見学</p>	<p>マラウイに到着した当日のオリエンテーションで「協力隊員の栄養状態があまりよくないのも、マラリアにかかる原因のひとつかもしれない。」と西崎さんがおっしゃっていた。市場に行くと確かに食品のパリエーションは少なかった。売っているものと言えばトマト、玉ねぎ、豆、からし菜、イモ類などの野菜、バナナ、ヤギ肉、豚肉(豚肉は宗教上食べられない人がいるので市場の外の広場で売られている)お酒くらいだ。野菜はだいたい一山 20~30MK で売られていた。隊員たちはこれだけの材料だけで、普段の食事を作らなければならないのだから栄養状態が良くないのも納得した。その環境の中で頑張っている隊員達を見て、改めてすごいと感じた。</p> <p>市場の様子を見ながら、山田さんに毎日どんな料理を作っているのかを聞くと「ここにある材料だけで日本の料理を作ろうとしても、あまりおいしいものは作れない。無理に作った日本料理よりもここに合ったシマを食べるほうがおいしい。」という答えが返ってきた。今では朝の水汲みからシマ作りまですべて一人でやっているという。現地の人たちと同じ仕事を自分でやることも彼らから信頼を得ている一つの理由ではないかと感じた。</p> <p>食料品の他に目を引くものは衣類だ。大溝さんの話によると、ここに売られている衣類のほとんどは国に寄付されたものだが、政府はそれを業者に売り、業者がこのような市場で売っていると言う。私たちを含め、先進国の人々が「寄付」と思って送った衣類がこのように扱われているが、これを送った人たちはどう考えるだろうか。マラウイに来る前の私だったら「せつかく寄付したのに政府が業者に売って、政府が儲けているとは納得がいかない。」と思ったかもしれない。しかし、簡単に物を援助することがその国の自立を妨げることにもなりうると思った今、「政府がもし衣類を売って儲けたお金で、教育などの資金にあてることのできるのであれば、それもいい方法かもしれない。」と思う。</p> <p>また女性が腰に巻いている布(チテンジェ)を買おうとすると、ほとんどが輸入物であることが分かった。つくづく農産物以外での自主生産しているものが少ないと感じた。</p>

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか/その他感想
8/3(火) リロング ウェ →ロビ	現地人宅へのホームステイ	<p>ロビの村の広場でホストファミリーと対面すると、暖かい笑顔で迎えてくれたアマイ(お母さん)にほっと一安心した。家に着くと、一番上のお姉さんが英語で挨拶をしてくれて、紅茶と African cake を出してくれた。お茶を飲んでいるといつの間にか私の周りには子供たちでいっぱいになっていた。この家庭はお母さん、子供が7人、孫が2人の大家族であった。一番小さい男の子には「ゆうま」という日本語の名前が付けられていた。聞くところによると、山田さんが付けたそうだ。これだけでも山田隊員がどれだけこの村の人たちに信頼されているのかが伺えた。家の中はソファやテーブルがあり、電気も通っており、マラウイでは裕福な家庭であることが一目で分かった。一晩という短い時間であったが、夕食時に特別にお米を出してくれたり、シマの付け合わせとして羊肉のトマト煮を出してくれたり、朝食に卵を焼いてくれたり、本当に私を大切な客として扱ってくれたことが分かり、感謝の気持ちでいっぱい。同じ参加者と「日本の生活では物質的に豊かであるが、精神的に余裕が無いことが多く、マラウイの人のような心のこもった温かいもてなしができるだろうか?」と話した。ここでもまた「本当の豊かさ」とは何だろうと疑問に思った。</p>
8/4(水) ロビ→ リロング ウェ	ロビ園芸適正技術普及視察	<p>マラウイの土と気候に合った果樹(モモ、グアバ、マンゴー、みかんなど)と野菜(キャベツ、玉ねぎ、トマトなど)の試験栽培を行っていた。マラウイの人は口でいくら言っても分からず、実際に自分たちが栽培する野菜や果物もこの農園に来て味見をして決めたり、ある農村が雨期にキャベツの栽培に成功すると自分たちもやってみようということになったりと、とにかく経験することが必要だそうだ。隊員達が初めて農村に行くと、種のまき方が適当であったり、果樹の周りに柵が無くてヤギに食べられてしまったり、無駄なことが多かったという。しかし、隊員達はそれぞれの村の状況を見て確実に生産率が上がるように、そして農民達に無理がかからないような指導を重ねている。フォローしているグループは72グループにもなり現在では苦しい状態だそうだが、休日も返上してまで農村を廻っているなど最大限の努力をしている。おそらくすべての農村がうまくいくわけではないし、帰国までにその成果を見られないものもあるだろう。しかし、長く時間がかかっても効率のよい農業の方法が普及し、それに伴って商業も発達し、マラウイの暮らしも少しずつ豊かになっていってほしいと思う。</p> <p>また隊員達が普及員として行き、成功している村も見せていただいた。そこの畑は共有の畑であり、いわば学校のようなものだそうだ。そこで野菜の育て方(種の撒き方、堆肥の作り方、野菜の特性など)を皆で作りながら学び、またその技術を自分の畑に持って栽培をするそうだ。彼女たちの夢は「お金を貯めて、家畜を飼い、トタンの屋根の付いた家に住むこと」という。その夢を実現するために手助けしている協力隊員の仕事はやりがいのあるものであり、これからも彼女達の夢のために頑張りたいと思った。</p> <p>訪問した時期は夏季休暇で、寮に残っている中等学校の2年生と4年生の授業や生活を見せていただいた。(2年4年は国家試験のある年なので強制的に寮に入り、補習も受けていた)</p> <p>1年生は1クラス100人と非常に人数も多いが、学年が上に上がるにつれて経済的な理由や妊娠出産などの理由で生徒数は減少する。授業は数学の確率と英語の形容詞の2クラスを見学させていただいた。小学校4年生から英語を習い始めるため、中等学校ではすべての授業が英語で行われていた。マラウイでは4年間教科書の無い英</p>

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか/その他感想
<p>8/4(水) ロビ→ リロング ウェ</p>	<p>ロビ・野原 隊員任地視 察(理数科 教師・チュ ワ中等学 校)</p>	<p>語の授業で、ほとんどの生徒が読み書き会話が習得できているが、日本は何年勉強してもなかなか英語を話せないことが長年指摘され続けている。マラウイでは英語が習得できなければ、進学も就職も難しいという環境があるから皆話せるようになるのか、英語教育の仕方がいいのか、小学校の英語の授業を是非見学したいと思った。</p> <p>先生と生徒の関係はととてもはつきりしていて、生徒が先生の言うことに逆らうことはないようだ。生徒の集中力も優れており、1日に40分授業を9コマ受けていた。通学距離を聞くと17キロを毎日2時間かけて通ってくる子もめずらしくないそうだ。日本の高校生と比べて「学びたい」という強い気持ちが生徒の雰囲気や彼らのおかれている状況からも察することができた。日本の高校生の目を同じようにきらきらさせるには何が足りないのか、何が余分なのか、どうしたらもっと生き生きとできるのか、考えなければいけないと思う。</p> <p>授業見学の後、日本の文化を紹介する時間としていただいた。生徒は興味深く取り組んでくれ、また野原隊員も「普段こんなことができないから、こんなふうにして授業をやっていたら生徒たちも喜んでますよかったです。」と言ってくださった。しかし後々考えると、補習の大切な時間をいただいてしまって申し訳なかったという気持ちと、日本の文化をいきなり教えてしまい、押し付けになってしまったのではないかと心配になった。(私達教員には本当にいい思い出になり感謝していますが。)</p> <p>ここでの学校見学は学校や環境を知ることが出来たこと以外にも日本の学校を振り返る機会にもなった。</p>
<p>8/5(木) リロング ウェ</p>	<p>ミサレ・峯 隊員任地視 察(理数科 教師・中等 学校)、生徒 との交流</p>	<p>ここでも日本文化の紹介や音楽の授業をやらせていただいた。峯隊員は「生徒はいつも教えてくれと言うけどなかなかそういう機会がもてなくて。」そう言って快く私達を迎えてくれた。生徒達は私達の教えること、持ってきたものに興味津々で、疑問に思ったこと、歌の意味などの質問を積極的にしてきた。交流後、数名の女の子からペンパルになってほしいと名前と住所が書かれた小さな紙切れを渡された。峯隊員から「本当にペンパルになってほしいという女の子もいれば、手紙に経済的に苦しいからお金を送って欲しいと書く子もいる。中には本当にペンパルが欲しい子もいるのでよかったですら送ってあげてください。返事を書かない子もいるかもしれないし、郵便事情が悪くて届かないこともあるだろうけど。」と事情も説明してくれた。</p> <p>交流後、校長先生が「峯先生が来てくれたことで理数科目のレベルが非常に上がった。しかし任期が12月までなので非常に残念である。この先生方の中で誰か峯さんの帰国後に来てくれませんか?」と話されていた。協力隊員の活躍をここでも知り、嬉しくなった。マラウイでは小学校の教員でも中等学校で教えることになったりすることもあるようで、そのような先生は必死に勉強して教えるそうだ。まだまだマラウイの教育には無資格教員が多い、小学校への対応が精一杯で中学校への対応が遅れている、などの課題が残されており、協力隊員の支援も必要とされている。しかし、中山さんは「教育がマラウイを変えていく。教育こそ国の力でできるようになるべきだ。」と言っていた。協力隊員の力を借りながら、少しずつ教育においても自立の道を切り開いていって欲しいと思う。</p>

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか/その他感想
	保健行政アドバイザーとの情報交換	<p>笠原さんからはマラウイにおける HIV/エイズの現状についての情報をいただいた。マラウイの HIV 感染率は都市部では50～60%にのぼり、毎年エイズで亡くなる人は8万人で、エイズ孤児も32万人いるそうだ。そのため、平均寿命は38歳とされている。現在は世界各国からの支援もあり、検査が無料で受けられたり、コンドームを居酒屋などにおいてすぐに手に入るようにしてあったり、ラジオで感染予防法を流したりと少しずつ対策は立てられているようである。しかしマラウイの医療事情は非常に悪く、マラウイの医大を出ても給料が安いいため、ほとんどの医者は国外へ出てしまい、医療従事者は少ない。その上医薬品が高価であったり不足していたりして、なかなか治療ができないようだ。エイズが広がっているために国の平均寿命は短く、協力隊のカウンターパートがせつかく技術を覚えても亡くなってしまい、事業の継続に繋がらないということもある。エイズの問題は国民の生命と国の発展に関わることであり、最優先で考えていかなければならないことだと思う。まだまだ治療薬もコンドームも啓発活動も十分ではない状態だ。WHO などが中心となって世界の問題と捉え、世界の人々に呼びかけ、啓発活動を継続して欲しいと思う。</p>
8/6(木) リロングウェ →ケープマクレア	ムーア博物館見学	<p>博物館に着くとスタッフから「ここには部族の風習や生活について展示されていますが、これを外に持ち出すとその民族の滅亡につながるのので、資料や衣装などの写真撮影は禁止です。」と言われた。National Staff の Tom さんによるとマラウイには7の大きな部族と約20の小さな部族があるらしい。国語がチュワ語になったのは、独立時の指導者がチュワ語を話したということと、チュワ語を話す人口が多かったからだろう。現在ではそれぞれの部族の言語はほとんど残っていない。昔は村の長が亡くなると若い女性を生け贄としたり、同じ部族同士が結婚すると血が濃くなり争いも起こるので他部族から嫁をもらったり、体が成熟するとその部族の踊りを教えられ結婚式や葬儀などの特別な時に使うこと、ある部族はもともと人間は病気になったり死んだりする存在ではなくそうなるのは誰かが呪っているからと考えること、村の長の跡継ぎはその息子ではなく長の姉妹の息子であること（直接の息子は自分の子供だという確証がないが、姉妹の子供ならば必ず血が繋がっているため）など多くの情報が展示されていた。1時間では見切れないほどのもので最後まで見ることが出来なかったのが残念である。Tom さんはマラウイの部族について質問されるとすべて丁寧に説明して下さり、その知識の豊富さに驚いた。海外に出ていつも私が感じることは、私の日本に対する知識の低さである。国際理解教育をするには自分の国についてもよく知っておかないといけない場面も多く出てくるだろう。これからの私の一つの課題は自分の国について見直すことでもある。</p>
8/7(土) ケープマクレア →リロングウェ	ケープマクレア散策	<p>マラウイ到着当日のオリエンテーションで住血吸虫の話聞いていたが、この湖に深刻な問題があるとは思えないほど美しい湖だった。湖には色鮮やかな淡水魚が泳ぎ、ダイビングをする人の姿もあった。自然保護区にも指定されており、世界遺産にもなっている。住血吸虫については、山形県にもかつてあった問題だが、水田を果樹園(桃)にすることで解決できたそうだ。マラウイでもかなり深刻な問題として捉えられているようだが、エイズの問題の方が深刻で住血吸虫の問題まで手がまわっていないのが現実だ。この問題を克服するにはかなりの時間と努力が必要になるだろう。しかし、この湖の美しさはマラウイの宝だ。早くマラウイの人も安心して泳げる、生活用水としても使えるような安全な湖になってほしい。</p>

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか/その他感想
<p>8/7(土) ケープ マクレア → リロング ウェ</p>	<p>JICA 現地 関係者との 懇親会 (7/29の JICA マラ ウイ事務所 訪問オリエ ンテーションを含む)</p>	<p>オリエンテーションでの医療衛生事情を聞いた時には、乾期であるのにマラリアにかかった JICA の関係者が今年は多くて西崎さんもショックを受けていること、マラウイ湖は美しく魅力的であるが、充血吸虫の問題が深刻で感染したことによって下半身不随など障害を引き起こすこともある、狂犬病の犬も多いので野良犬には手を出しては行けないこと、など日本では聞いてこなかったことも多く、私を含めて参加者全員かなり驚き、それからの生活が不安になってしまった。しかしこれだけの情報をいただいたので、2週間健康面には気を付けて生活ができ、全員無事に帰ってこられたのだと思う。</p> <p>懇親会では、それまでお世話になった方々とまたお会いすることができて本当にいい会だった。「もし個人旅行でマラウイにしたら、きっと国立公園に行つて野生動物を見てマラウイ湖を見て一流のホテルばかり泊まって、何も得ることが無かったかもね。」と同じ参加者と話したことがある。2週間という短い期間であったが、私たちがマラウイについていろいろなことを勉強できるようにいろいろなプログラムを組んで下さり、JICA の事務所の方々、National Staff、専門家の方々、協力隊の方々、バスの運転手さん、すべての方が本当に素晴らしい方々でこのような方に出会えたことを感謝したいと思う。</p>
<p>全体</p>	<p>全体を通じて、又は上記各訪問先以外の場面</p> <p>中山さんとの情報交換会</p>	<p>中山さんとの情報交換会では教育関係のことだけでなく、国事情についての質問をたくさんすることができ、有意義なものだった。</p> <p>(教育事情についての問題点)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・アフリカでは「老人が亡くなると図書館が3つなくなる」と言われている。これは老人が生活に必要な知識を多く持っていることであり、以前は彼らから学ぶことが多かったということでもある。しかし最近では学位が重要視されており、問題となっている。</li> <li>・教員の給料は3000~4000MK (約3000~4000円) で決して高いとは言えない。これで自分の子供だけでなく、兄弟の子供もみなければならない。</li> <li>・昔は小学校を卒業したら英語を話せるようになっていたが、今は話せない子供もいる。教育の質が落ちている。(柿崎隊員によると、進級に関わる国家試験でもカンニングは当たり前になっているそうだ)</li> <li>・初等教育が無償になったので多くの生徒が学校に来るようになり、校舎や教員の数が足りない。そのため国家の教育予算の75%が初等教育につき込まれ、中等学校・大学へ資金が回らない。</li> <li>・障害者に関しては周りがサポートして学校へは連れて行くが、体制は整っていない。卒業後の進路は難しく、ストリートチルドレンになってしまうこともある。(国は政策を考えている段階)</li> </ul> <p>(国の問題点)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・マラウイの政府予算の40%が外国からの援助で、「援助漬け」の状態である。「自分で何とかしよう」という気持ちがない。政府自体もいかに援助をもらえるかということに必死である。</li> <li>・マラウイの医療事情は悪いのは医者数が少ないということもある。マラウイの医者の給料は少なく、医科大学を卒業しても給料のいい国外へ出てしまう。</li> </ul>

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか/その他感想
全体	全体を通じて、又は上記各訪問先以外の場面	<ul style="list-style-type: none"> <li>・このままマラウイのエイズ問題が進んでいってしまったら平均寿命は32歳くらいになってしまうだろう。政府関係の仕事に就く人は大卒がほとんどだが、大学卒業後余命が少なくなってしまう。協力隊のカウンターパートも技術を教えても亡くなってしまうことも少なくない。</li> <li>・農業はできないとお金が貯められないのでとても必要であるが、商業化ができない。農産物をそのまま売るのではなく、加工（パイナップルをシャーベットやジュースにするなど）できれば農業以外のことでお金を稼ぐことができるのに、そのような工夫がない。</li> </ul> <p>*これらのことを聞いて「私たちがマラウイにできることはなんですか？」という質問が出た。それに対して中山さんは「物を安易にあげない、まずは友達になってそこから考えることですかね。」と答えた。マラウイの抱える問題は複雑に絡み合っていて、1つ1つ解決していくというよりは同時にいろいろなことに取り組んでいかなければ良くなっていかないだろう。飢餓やエイズ問題のように人命に関わる問題に関しては資金援助も必要であるが、常に「自立」ということを頭に入れたものでなければならない。50年前の日本は今のマラウイと同じような状況だったが、豊かさを求めて今のような物質的には豊かな国が出来上がった。しかしそれに伴う問題（環境問題・自殺・不登校・いじめなど）も多く出てきており、決して日本が幸福な国とは言えないと思う。幸福の価値観は国によっても個人によってもかなり違うものであるが、幸福の根底には「命の保証」は必要だ。今は直接できることが分からず歯痒い思いをしているが、学校という場で生徒達とともに時間をかけて開発援助や国際理解について考えていきたい。</p>

## JICA教師海外研修 報告書

提出日	平成16年8月 日	訪問国	マラウイ共和国
学校名	伊勢市立宮川中学校	氏名	中津 俊彦

## 1-1. あなたやグループとしての現地研修への目的やねらい（主眼点・期待など）

- ・ アフリカ（マラウイ）の一部分を知ることによって世界観的視野を広げること
- ・ マラウイの人々の暮らしを知ることによって、人類の多様性に関する認識を深めること
- ・ 国際協力、開発援助の現場を見、話を聞くことなどによって、その課題と可能性を探ること
- ・ マラウイの人々とのふれあいの中から、心の同一性に関する認識を深めること
- ・ 世界的視野の観点から自分たちの生活を見直し、人類共通の課題等を考える足場を構築すること
- ・ 学んだことなどを、分かりやすく、多くの人達、子供たちに伝える手だてを考えること

## 1-2. その目的やねらいの達成度

- ・ アフリカに対して更に深い興味を持つことに繋がり、世界観が少し広がったように思う
- ・ マラウイの人々の暮らしから、文化の差異と、心の問題との相関性について考えるようになった
- ・ 協力隊員の現場での苦労ややりがいなどを垣間見て、開発援助の意義や困難性が少し分かった
- ・ 人々の「くらし」の一部から、心の同一性に関する人類共通の課題等が自分なりに見えてきた
- ・ 日本人の一般的な生活の中での反省点、課題等が多方面から明らかにされていった
- ・ 体感や感動を多くの人達に伝えることの難しさを痛感している

## 2-1. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

- ・ 自然の美しさ大切さ。自然や動植物との共生の重要性と困難性など
- ・ 食物の重要性と、その母胎となる農業と農業技術指導などの重要性など
- ・ 異文化であれ、貧富の差があれども、人々が生きていくところに「くらし」があるということ。
- ・ 空いた時間を埋めようとするのではなく、空いたままにしておくという心のゆとり、豊かさ
- ・ 人が生きる基本は、食べ物であり、農業であり、それを取り巻く自然の豊かさであるということ
- ・ 自立をうながすための開発支援、文化伝承としての開発という視点
- ・ 「学び」の共通性、 「学ぶ側」・「教える側」の姿勢の共通性

## 2-2. 参加者・スタッフから学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

- ・ 協力性と「気配り」
- ・ 価値観の多様性とそれを享受するところ
- ・ 見えるものすべての視点の相違と共通性
- ・ 自分自身の弱さと他者への依存性 日々の生活の創意工夫のなさ 体力鍛錬不足
- ・ 己の傲慢さ 独善的な考え方への猛省

### 3. 現地研修の経験の 何を何につなげよう と思ったか

- ・物がなくても豊かな心を持って生活している人々の「暮らし」から私たちの生活を振り返り、物が豊かになった見返りとして失ったものを再発見し、取り戻す努力をする足がかりをつかみたい。
- ・マラウイの子供達、学校の生徒達の学ぶ姿勢から、「学び」の本来の目的、意義などについて、職場の仲間や生徒達、そして多くの人達と考えてみたいと思った。
- ・現地の JICA 職員や協力隊員やマラウイの人々の様子などを紹介する中から、開発援助のあり方やその意義などについて、多くの人達の考えを聞きながら自分なりの考えをもてるようにしたい。
- ・今の自分たちの生活と、マラウイをはじめとする多くの開発途上国の生活を考えながら、21世紀における人類共通の課題などを多くの人達が考えるようになるための教育分野における役割などについて考えていきたい。

### 4. JICAの開発援助事業に対する感想や提案

- ・大変有意義ですばらしい企画であり、この研修に参加させて頂けた私自身の幸運に JICA 及び関連の方々に対しても感謝している。
- ・JICA の存在意義などが自分なりに十分理解でき、今後の教育活動に十分に生かしていきたい。
- ・現地の JICA 職員や隊員の方々の活動に対し、深い敬意の念を抱くと共に、このような活動の積み重ね、総和が今の世界の状況、未来の人類に対する夢や希望を支えているものだと感じた。

その上で

- ・事前研修や事前自主研修を更に充実させ、日本で手に入る現地の情報、資料などをできる限り把握しておけば、現場において更に深い研修が積めるであろうと感じた。
- ・研修教職員の現地での、宿泊等の待遇が恵まれすぎていると感じた。これまでの取り組みの反省や諸事情等もあると思われるが、待遇のレベルを少し下げそれを他の諸費用に回してもよいのではと感じた。
- ・訪問国によっていろいろな事情があると思われるが、現地の人達との膝をつき合わせるような交流やホームステイやホームビジットなどにもう少し時間がとれば、より深い現地に対する理解や研修や個人の人々の生活への更に深い思慮などにつなげられるのではないかと思う。

### 5. 研修（事前研修等を含む）に参加して良かったことや、より良くするための提案

- ・日本国内で受講した開発教育指導者研修会はとても有意義なもので、現地研修においても十分に生かせるものであった。今後もこのような研修を多くの人々に知らせ、更に充実したものにしていくと共に、できるだけ多くの子どもや生徒達にも開発教育を受ける機会を与えるための企画を行ってほしい。
- ・上記のことは行うために、海外研修に参加した教職員をどんどん利用してほしい。
- ・教育委員会や管理職の開発教育に対する理解を深めるための取り組みを行ってほしい

### 6. その他全般を通じての感想・意見など

- ・このような企画をしていただいた JICA 及び NIED をはじめとする関連の方々、開発教育指導者研修会、海外研修参加の方々、マラウイでお世話になった現地在住の方々、数多くのマラウイアン、子どもや生徒達、そして支えてくださったすべての方々に感謝申し上げます。

7. 訪問先ごとの気づきと築きなど

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか/その他感想
7/30(金) リロングウェ →ゾンバ	ドマシ教員養成大学 視察	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育や「学び」というものが持つ意義や私たちの仕事の重要性を再確認させられた。</li> <li>・教育面に対する支援の必要性とその方策などについて</li> <li>・国の電気普及率（4%）と情報教育推進の矛盾</li> <li>・大学の図書館に本の数が少なすぎる～ムダの多い日本との差違</li> </ul>
	小学校訪問と交流	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マラウイの子供たちのバイタリティーと日本の子供たちには滅多に見られないような瞳の輝きは、どのような生活背景から来るものであるのかをじっくり検証し、共に考えたいと思った。</li> <li>・来客者を心から迎えるマラウイの人々の真に温かい心に感動</li> <li>・HIVに対する教育の徹底と人々の気概</li> </ul>
7/31(土) ゾンバ	ドマシ水産養殖プロジェクト視察	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大溝さんの大地に根ざした生き方、常に現場とそこで暮らす人々とその暮らしを一番に考える生き様に深い感動を覚えた。</li> <li>・開発援助の限界？～援助なれしてくる人々、どこまでが支援なのか援助された化学肥料を使用したことによって土地がやせ細り、継続使用不可能になった土地もあったという現実</li> <li>・農業でも水産養殖でも自然の生態系を大切にしなければならない</li> <li>・（目に見えるもの）－（衣服）＝マラウイ という現実</li> <li>・幸せそうな笑顔の農家の人達は本当に幸せなのか？</li> <li>・農業立国なのに食物が不足 10～12月にかけては、2～3日に一回の食事の人も数多くいる～「貧困の輪」の現実がここにある自分に何ができるのか！！といった無力感に襲われる</li> <li>・苦労して、時間をかけて養成した技術者達がエイズで次々と死んでいく現実</li> </ul>
8/1(日) ゾンバ→ リウォンデ	リウォンデ国立公園 ツアー（野生生物）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本では絶対見られないような自然の豊かさと雄大さ</li> <li>・電柱など人工的なものが一切ない広々とした大草原</li> <li>・リウォンデで出合った新着協力隊員のエイズと闘うという気概</li> <li>・ワニが泳ぐ河の水の清らかさと水面の輝き</li> <li>※動いているカバ、走っているカバが見たかった</li> </ul>
8/2(月) リウォンデ→ リロングウェ	小規模灌漑技術開発 調査（Tilime 村、 Tikorele 村、Mank- hamba 村視察	<ul style="list-style-type: none"> <li>・農業における開発支援の重要性を肌で感じる事ができた。</li> <li>・「こんなところを車で行くの？」「こんな密林のような先に本当に人々が住んでいるところがあるの？」といったようなところを突き進んだ先に多くの人々が暮らす村があり、畑があり、そして農業開発援助の現実があった。</li> <li>・ネズミやトカゲをしっかりと手に握りしめ、デコボコの大地を裸足で笑って手を振りながらどこまでもバスを追いかけてくる数多くの子供達の姿が今でも目に焼き付いている。</li> </ul>
8/3(火) リロングウェ →ロビ	現地青年海外協力隊 員との交流・情報交 換会（隊員との昼食 会を含む）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マラウイでの現地隊員の生活の苦労とそれを乗り越える精神力、目的達成のための協力体制、任務遂行のやりがいなどを語っていただき、広い視野と柔軟な応用力、強靱な体力と精神力をもって海外で活動する若者の姿を多くの人たちに伝えたいと思った。</li> </ul>

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか/その他感想
8/3(火) リロングウェ →ロビ	マーケット見学	<ul style="list-style-type: none"> <li>・まるでタイムスリップして、200～300年前のアメリカの西部に いるような町並み、市場、人々の息づかい・・・etc</li> <li>・ものを売る人々の活気と暮らしの「貧しさ？」のギャップ</li> <li>・加工した売り物や既製品がほとんどない市場</li> <li>・チブク（地酒）を飲んで踊る人達～本当に心から楽しそう</li> </ul>
	現地人宅へのホーム ステイ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本で考えるライフライン（電気、水道、ガス等）がなくても、こん なにもこころ豊かな生活（生活の一部でしかあり得ないが・・・）が送 れることを教えていただいた。が、この生活をずっと続けていく自信 はない。機械文明に慣れすぎた我々は、自然に対してとても弱く人間 として退化しているということを感じた。</li> <li>・降るような星空を見て、空気のきれいさを実感した。</li> </ul>
8/4(水) ロビ→ リロングウェ	ロビ園芸適正技術普 及視察	<ul style="list-style-type: none"> <li>・農業技術分野での国際援助の必要性を痛感した。</li> <li>・人間が生きていく上での基本は、食べ物であり、農業であり、それを 取り巻く自然であることを、日本での生活の中で今一度考え、自分な りに実践していきたいと思った。</li> <li>・農業分野での開発援助が、長期的な視点から、今後どのような進展を していくのかなどを7月31日の大溝さんからのお話をもふまえた 上で自分なりに考えていきたいと思った。</li> </ul>
	ロビ・野原隊員任地 視察（理数科教師・ チュワ中等学校）、生 徒との交流	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科書がない、ノートがない、筆記用具もない生徒が多いにもかかわ らず、生徒達の学ぶ意欲には圧倒された。何のために、何を目標に学 んでいるのか、生徒達の本音を直にもっと聞いてみたいと思った。</li> <li>・物質的には恵まれている日本の子どもたちとの差は何なのかなどを、 マラウイの子どもたちの学ぶ様子を紹介しながら、職場の仲間や 生徒達とともに考えてみたい。</li> </ul>
8/5(木) リロングウェ	ミサレ・峯隊員任地 視察（理数科教師・ 中等学校）、生徒との 交流	<ul style="list-style-type: none"> <li>・未知へのもの（ここでは、日本語と漢字、書道を紹介）への好奇心が 旺盛で、日本の学校で見られるようなシラケムード的なものは一切感 じられず、指導する側もその熱気に引き込まれてしまい、教える意欲 ややる気が引き出されていくのを感じた。</li> <li>・純粋に学ぶ意欲を持った子どもたちは日本にもたくさんいる。（「学び」 の共通性）それを阻害するものの一つとして、まず固定観念にしばら れた教師の姿勢があるのではないかと思った。教育の原点にまず教師 が戻らねばならないのではないか。</li> </ul>
	保健行政アドバイザ ーとの情報交換	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アフリカ、マラウイにおけるエイズ禍の現状と取り組みの概要を短時 間であるにもかかわらず、要領よく、わかりやすく説明いただいた。</li> <li>・日本においては、エイズに関してまだまだ誤認や偏見等が多いと思う。 この国におけるエイズ撲滅に対する人々の気概や取り組みなどを日 本の教育の中でも生かしていけないかと考える。</li> </ul>
8/6(木) リロングウェ →ケープ マクレア	ムーア博物館見学	<ul style="list-style-type: none"> <li>・とても見応えのある貴重な美術館で、マラウイにおける3つの部族の 風俗や習慣などが資料や写真などを通して少しは理解できたつもり だが、事前の勉強不足と写真撮影禁止で資料が残せなかったりなど で、次にどう生かしていけるかがはなはだ疑問である。</li> <li>・現地の風俗や習慣、文化や歴史などの簡単な事前学習でもしておけ ばもう少し深い研修になったと反省している。</li> </ul>

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか/その他感想
<p>8/7(土) ケープ マクレア→ リロングウェ</p>	<p>ケープマクレア散策</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手つかずの自然に囲まれ、また、そこに住む人々とのつかの間のふれあいなどで、とてもんびりと心が開放される半日間を送ることができた。</li> <li>・この素晴らしい大自然を多くの人々に満喫してもらいたい。でもそうになると、この自然はなくなる、といった利己的な矛盾を感じる。</li> </ul>
	<p>JICA 現地関係者との懇親会 (7/29 の JICA マラウイ事務所訪問オリエンテーションを含む)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・既存の価値観を激しく揺すぶられるような現地で得させていただいた素晴らしい体験を、短時間でとても語ることはできなかった。この先の恩に報いるために、些細なことでも自分にできることは何かを真剣に考えていきたいというこの時の気持ちを忘れずにいたい。</li> </ul>
<p>全体</p>	<p>全体を通じて、又は上記各訪問先以外の場面</p> <p>〔ペンを欲しがる子どもたち〕</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・“Give me money”ではなく“Give me pen”と言って近寄ってくる子どもたち、字や絵をイッパイかきたいと思う年頃なのだろう。毎日楽しそうに絵をいっぱいかいている自分の小学生の娘たちや、文具をむだ遣いしている日本の子どもたちが浮かび「ペンくらいあげてもいいじゃないか・・・、でも・・・」と何度も何度も思う。あの子たちの真剣な眼が、小さな手が今でもわたしを苦しめる、悩ませる。</li> </ul>

## JICA教師海外研修 報告書

提出日	平成16年8月吉日	訪問国	マラウイ共和国
学校名	金沢市立兼六中学校	氏名	福島直美

### 1-1. あなたやグループとしての現地研修への目的やねらい（主眼点・期待など）

私がこの研修に参加した目的の1つは、開発途上国の社会・教育事情や様々な協力活動の視察を通じ、日本の中だけでは、見えてこなかった現実や伝わらなかった情報を、自分の目で確認したいということです。そして、同じ時間に同じ空気を味わうことのできたチームの人たちと、その場で捉えた事実をもとに、共に語ることで幅広い視点を持ちたいと考えました。

2つめは、私が長いこと追求し続けている音楽に関するものです。音楽の授業のカリキュラムである「世界の諸民族の音楽」を学習する際、「音楽の世界における、無意識のうちの分類と価値づけを停止し、世界各地で創り上げられてきたあらゆる音楽文化を、価値づけせずに対等に眺める意識を育成する。」ということを目指しています。このための教材をこの国で見つけることができると考えました。歌や楽器演奏という形での音楽とその音楽を取り巻く状況、文化としての音楽、生活の中に根付く音楽という視点で探しました。

### 1-2. その目的やねらいの達成度

1つめの目的である「日本の中だけでは見えないものを自分の目で確認したい」ということに関しては、期待した以上の成果があったと思います。そこで見えてきたものを同じチームの人たちと語り合う中で、また違った発見をすることもあり、自分の蓄えが増えていったように思います。

2つめの目的である「音楽教材を発掘したい」ということに関しても、考えていた以上にたくさんの歌声、楽器演奏の映像、チェワ語の歌詞、楽器、マラウイの音楽事情などを集めることができました。

### 2-1. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

全体のワークショップでも話題になっていた、「幸せとは何なのか」ということが、私の中では大きな位置を占めています。毎日毎日1分1秒単位の時間に追われ、あくせく働き、家族の面倒をみて、無理矢理よき日本人を演じている自分とは何なのだろうと、フッと考えるときがありました。マラウイへ行って、「幸せとは」を考えるようになってから、自分の中でも変化した部分があり、余裕を持って物事を考えることができるようになりました。だからといって、「幸せとは何なのか」の答えがはっきりでたわけではないのですが……。

### 2-2. 参加者・スタッフから学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

途中からこの一行が、「旅芸人一座」と名称変更するほど多才な人が集まった集団で、毎日が刺激的でした。どの人と話をしても、いつまでも話題が尽きないという経験は、今までになかったことです。普段どちらかというと自分は元気な方だと思っていたのですが、相当に上回るベリースペシャルパワフルな人が多いので、私はついていくのでやっとなりました。皆さんの素晴らしい行動力は、本当に見習いたいところです。

### 3. 現地研修の経験の 何を何につなげよう と思ったか

TV番組の「あいのり」がマラウイだと聞いて早速見てみました。番組を見ながら、ここはどの辺りかとかこの国はこんなんじゃないとか自分のイメージとプロデューサーの思惑の違いを家族に訴えていました。普通は誰と誰がどうした、告白してどうなったという辺りがメインの番組ですが、時々映る背景を見て、視聴者（若者？）は一体その国をどのように捉えるのだろうかということが大変気になりました。

その国を知っているといっても、たかだか10日程滞在しただけで国について語るのは無謀であることは承知していますが、そのわずかな時間に見てきたことをできるだけ正確に、自分のイメージで湾曲せずに伝えていきたいと考えております。その中に少しでも興味・関心を示してくる生徒が出ることを期待したいと思います。

日本人はあまりの豊かさに感覚が麻痺し、仮に「貧しい国」と聞いたとしても自分たちの範疇でしか物事を捉えられなくなっているように感じます。電気がない、トイレがない、病気が蔓延している、平均余命が少ないなどと言われても、想像できにくくなっていると思います。その感覚に少しでも風穴を開けるために、できるだけ体験的・実践的な内容を盛り込んで、自らの経験から導き出していけるような手だてを考えたいと思います。

心から相手のことを理解できるようになったら、次は自分から行動を起こしていくと思うからです。

### 4. JICAの開発援助事業に対する感想や提案

マラウイの人々の生活ぶりを見ていると、先進国がいかにも途上国の援助だといわんばかりに資本主義の考えを押しつけ、発展させていくことは本当に必要なかどうか考えてしまいます。それは、思ったより貧困が深刻でなかったからそう感じたのかもしれませんが、しかし、HIV エイズの感染率・死亡率、平均余命が38.5年であること、何よりも国民の覇気のなさを見ていると、健全な国家とは到底いい難しいものがあります。

田舎が街になっていく過程には必ず「自然破壊」が含まれるので、手放しで喜ぶわけにはいかないのですが、便利な暮らしが目の前にぶら下がっている以上、よりよい生活を求める気持ちを持つことは当然だといえると思います。また、人間の歴史から見ても、営みの根底には課題があれば追求し今より物事を改善させていこうとする気持ちがあると思います。JICAはそういう気持ちを応援する団体だと思います。何もしないで批判している人より、何か行動を起こした人の方がずっと素晴らしいと思います。これからも世界が安定し、より平和になることにつながるような活動を心がけていただきたいと思います。

### 5. 研修（事前研修等を含む）に参加して良かったことや、より良くするための提案

海外研修の前の事前研修では、あまり経験したことのないようなたくさんのワークショップあり、大変戸惑いました。ワークショップの内容は、様々な方向からよく考えられており充実していましたが、設定時間が短すぎるため、私自身は消化不良になったように思います。もう少しじっくり考えたいものや他の人の意見をもっと聞きたかったものもありました。たくさん内容をこなすためには、短時間で自分やグループの意見をまとめることも必要かもしれませんが、「深める」「高める」場合は、ある程度の時間の確保、できれば「予習」してくるぐらいの気持ちの余裕が持てるとベストだと思います。

### ~~6. その他全般を通じての感想・意見など~~

## 7. 訪問先ごとの気づきと築きなど

・「マナビノオト」に書き留めたことをふりかえり、まとめてみてください。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか/その他感想
7/30(金) リロングウェ →ゾンバ	ドマシ教員養成大学 視察	あまり学生の姿を見ることはできませんでしたが、パソコン室や図書室などで出会った生徒の顔は、自信に満ちあふれているように感じました。アルバイトに明け暮れ、目的なく大学に通っている日本でよく見かける学生の姿と比較しながら、教育のあり方を考えたいと思います。中山さんの人柄は、正に「これぞ日本人」というような素敵なお人柄でした。
	小学校訪問と交流	魚を捕る仕掛けや HIV エイズについて学校教育で行っていることはよくわかりました。子どもたちがあちこちから集まって大変な人数になっても、勝手な振る舞いもせず大人の言葉に耳を傾けることのできる姿は、日本の小中学校の生徒たちにぜひ見てほしい部分です。学校を挙げて出迎えてくれた方々の気持ちが、とても温かく感じました。
7/31(土) ゾンバ	ドマシ水産養殖プロジェクト視察	大溝さんの話は、西崎さんの話と同じくらい衝撃を受けました。印象に残った言葉は、「poverty trap (貧困の罠)」「マラウイの景色ー(マイナス)服」「論文より現場」「貧困は本当に不幸なの」など。フィールドで勝負をしている人だからこそ、言葉に重みを感じられるのだと思います。農民の方の素晴らしい歌声は、音楽の授業で披露します。
8/1(日) ゾンバ→ リウオンデ	リウオンデ国立公園 ツアー (野生生物)	しか、さる、りす、ぞう、とり、うし?などを発見しました。道路の近くには来ないのかも知れませんが、あまりの少なさに「動物の減少」を心配します。美しい景色の映像と合わせて、「ワシントン条約」にも触れられればよいと思います。動物園や図鑑でしか見られない動物が、野生の姿ですぐ目の前に現れる感動は、なかなか味わえないものです。
8/2(月) リウオンデ→ リロングウェ	小規模灌漑技術開発 調査 (Tilime 村、 Tikorele 村、Mank- hamba 村視察)	斜面を上手に使い、畑に向かって水路が走っていました。畑の中の細かい水路には、ビニールと砂袋を使い手作業で水を流すそうです。簡単な灌漑設備ですが、生産性が上がり、収入が増えればより新たな工夫も生まれるものと思います。家泉氏は病み上がりの顔色でひどそうでしたが、新品の長靴まで用意してくださり、大変ありがたかったです。
8/3(火) リロングウェ →ロビ	現地青年海外協力隊 員との交流・情報交 換会 (隊員との昼食 会を含む)	協力隊員とお会いするのは初めてでしたが、若いのに人間的にしっかりした人が多いという印象を受けました。知らない土地に生活するだけでも大変なのに、短期間に実績を上げなければならないわけです。プレッシャーも多いと思いますが、こなせるのは自分の目的がはっきりしているからでしょうか。こんな前向きに生きている人たちに来校いただき、年齢の近い生徒たちに熱く語ってもらえればなあと考えています
	マーケット見学	カメラやビデオは使ってはいけないということで、大変緊張して見学をしたように思います。マーケットを通して、人々の生活の様子が垣間見えそうです。国の様子を伝える参考資料にしたいと思います。
	現地人宅へのホーム ステイ	このツアーで一番神経のすり減った瞬間でした。話したいこと、聞きたいことがたくさんあるのに、伝えられないもどかしさ、悲しさでどうしようもできませんでした。ご家族の方々も本当に素晴らしい人たちで、一生懸命コミュニケーションしてくださいましたが・・・。別れる間際に住所とメールアドレスを書いた紙を手渡してくれたときは、ジーンとしました。この先、気持ちを伝えることができると期待ももてました。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか/その他感想
8/4(水) ロビ→ リロングウェ	ロビ園芸適正技術普及視察	ロビの農場では、その地域で生産性の上がる作物は何かを調べる実験栽培が行われていました。この地域は日本人から技術援助を受けているためか、治安もよく、落ち着いた生活環境でした。「お金を貯めて、家畜を飼って、トタン屋根の家を買う」という夢に向かって働いているそうです。どこでも同じように幸せを求めているのだと感じました。
	ロビ・野原隊員任地視察(理数科教師・チュワ中等学校)、生徒との交流	ロビのセカンダリーの生徒は、制服もあり、落ち着いた感じがしました。交流授業で音楽をしましたが、大変素直に一生懸命覚えようとしてくれました。マラウイの歌を歌ってほしいとお願いしたところ、即座に素敵な歌声を披露してくれました。歌詞も教えてもらったので、是非楽譜にしてアフリカ音楽の教材を作成したいと考えています。
8/5(木) リロングウェ	ミサレ・峯隊員任地視察(理数科教師・中等学校)、生徒との交流	ミサレのセカンダリーの生徒は、ロビと雰囲気の違い、親しみやすい感じがしました。音楽の交流でも歌詞の意味に質問が相次ぎ、盛り上がった授業になりました。どちらの生徒も共通していえることは、大変学習に前向きであり、意欲的であるということです。日本の教育のあり方に様々な意見がありますが、考え直す時期にきているのかもしれない。
	保健行政アドバイザーとの情報交換	HIV エイズについての現状をお聞きしました。現在の感染者数は90万人で、エイズ孤児は32万人に上るそうです。一夫多妻や女性の地位が著しく低いことが、エイズの減らない原因と考えられます。社会的文化的要因というのは、啓発活動や教育でねばり強い意識改革を必要としますが、平均余命38.5年という状況は、急務を要する事態であります。
8/6(木) リロングウェ →ケープ マクレア	ムーア博物館見学	ンゴニ族は戦いの得意な民族でチェワ族、トゥンブカ族を征服しました。その後ヤオ族が絶対的な権力を握って支配しました。博物館では、それぞれの部族の宗教的行事や慣習、生活の様子を、人形や道具、写真などでわかりやすく展示してありました。現在でも冠婚葬祭などの場面で、昔ながらのやり方でなされているところもあるということでした。
8/7(土) ケープ マクレア→ リロングウェ	ケープマクレア散策	デコボコ道にも慣れウツトしていると、「湖だ！」の声。遠くに日本海のような美しい湖が見えました。ケープマクレアは、砂浜と岩場のある海水浴場のようなところ(能登半島でもよく見られる風景)で、つい泳いでしまいたくなる湖でした。ところが、泳いだら最後。ここにはあの恐ろしい「住血吸虫」がいて、いつの間にか毛穴から侵入し悪さをするのでそうです。「美しいものにはトゲがある」という言葉の例ですね。
	JICA 現地関係者との懇親会(7/29のJICA マラウイ事務所訪問オリエンテーションを含む)	やはり事務所訪問オリエンテーションでの西崎さんの嚴重注意が効いているせいか、一人の脱落者も出さず旅行を終えることができたのだと思います。懇親会で西崎さんは、「隊員の中には慣れによって初心を忘れ、病気や事故に遭遇することもある」と話していました。他の国へ行くと、日本の生活しやすさが再認識され、大変ありがたく感じます。日本のよい点をわかって大事にする気持ちを育てないといけませんね。
全体	全体を通じて、又は上記各訪問先以外の場面  (トイレ、太鼓)	この国を代表する民芸品である木彫りは、高度なテクニックで時間をかけて制作されていました。値段は手ごろなので、本当はゆっくりショッピングしたかったのですが・・・。太鼓の音楽も含めて、マラウイの文化として伝えたい部分です。もう一つ貴重な体験だったのが、「トイレ」です。人間の尿尿を肥料として使わない民族ということで、あまり発達する必要がないのかもしれないかもしれません。お陰で、どこでもできちゃいます。

## JICA教師海外研修 報告書

提出日	平成16年8月23日	訪問国	マラウイ共和国
学校名	鯖江市吉川小学校	氏名	松山 純子

## 1-1. あなたやグループとしての現地研修への目的やねらい（主眼点・期待など）

日本との相違点・同一点を、見たり聞いたり味わったり触れたり感じたりする。生活面だけでなく、様々な活動から、多角的にマラウイを知る。

また、支援活動を通して、どう変わろうとしているのかを知り、自分が教育の分野で、どう関わっていくかの方向性を決める。

## 1-2. その目的やねらいの達成度

多くのことや人との交流を通して、様々なことを知り、感じる事ができた。しかし、一筋縄ではいかない問題に、私自身が落ち込んでしまい、日本の小さな教室で何ができるのかが分からなくなってしまった。その上、あまりに多くの問題に、どのことをどう伝えればいいのか、いまだに悩んでいる。それほど強烈に心に残った。問題のうわべだけを伝えるようなことにはならないよう、気をつけたい。

## 2-1. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

笑顔が、ほんとに素敵でした。豊かな生活とは、なんだろうかと考えさせられました。現状に満足することは、良くない事もあるだろう。緩やかな向上では、飢餓に耐えるのは大変だろう。しかし、幸せな生活には必要なことのように思いました。全てのバランスが大切なのかもしれません。

何より嬉しかったのが、各地で受けた温かい歓迎です。片言の英語なのに、何とか分かるうとしてくれました。真剣に聞いてくれることが、こんなに嬉しいことなのだと改めて気づきました。ホストファミリーの方にも大変お世話になりました。いろんなことを伝えようと、英語で何度も言い換えて説明してくれました。気持ちは、言葉でなくても伝わると感じる事ができ、嬉しかったです。

## 2-2. 参加者・スタッフから学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

協力隊の方々や調査員の方々の思いを聞き、大変感動しました。複雑な問題がたくさんあるなかでの活動は、大変なご苦労もあると思います。そのなかで、自分の分野で頑張るしかないと言い切り、意志の強さを感じました。教えることができる技術があること、自分の使命を感じて仕事をしていること、あまりに輝いていて、自分に自信がなくなり羨ましくなりました。でも、それでも自分の分野でがんばるしかない。何ができるか考えていくことは、これからずっとしていかなければいけないことだと思います。

### 3. 現地研修の経験の何を何につなげようと思ったか

日本との相違点から、マラウイの子ども達がしていたことを体験させたい。やはり、異文化体験は、大きく違う点（荷物を頭の上に乗せて運ぶ・はだして遊ぶ・シマを食べる）を体験することで、心に残るのではないかと思う。しかし、辛いや可哀想という印象で終わらないように、あの笑顔や優しさにも触れさせたい。

答えの無い問題に直面したときの、はがゆさと苛立ちを、そのまま子ども達にも体験させられないかと思う。端的に物事を考えがちな子ども達が、答えが見つからない中で、それでも自分たちが日本で出来る事を考えてもらいたい。

### 4. JICAの開発援助事業に対する感想や提案

現地にあるもので、現地の人たちが行える活動を、技術面で支援されていることを知りました。無いものを補えばいいという単純なものではない、援助の難しさを感じました。それと同時に、援助は産業だという複雑さも感じ、今までの考えの間違いの多くに気づきました。また、技術援助を強要することはなく、自分たちからするという決心がない限り行わないという点に共感しました。隊員が帰国した後まで考えた、自立する為の援助が必要なのだと気づかされました。

（二度目に海外協力隊に参加した時のシニア隊員というネーミングが、シニアと言う言葉のイメージで、年配の方を連想させます。今回山田シニア隊員にお会いし、若さにびっくりしました。あの若さでシニアと呼ばれるのは違和感を覚えたのですが、他のネーミングはないのでしょうか）

### 5. 研修（事前研修等を含む）に参加して良かったことや、より良くするための提案

国際問題を扱うには、私は何も知らず、このまま授業をしていたら、うわべだけの善意を押し付けていたように思う。その過ちを犯さなただけでも、大変価値があったと感じている。また、事前研修では、貧困の輪など、知らなかった国際理解教育の基礎の部分もおさえてくださったので、現地研修での話もすんなり理解できる点が多々あった。私の勉強不足の点ですし、ほんとに何も知らず参加している先生はいないのかもしれないのですが、できれば、話し合いの中で出て来た、ワークショップや様々な聞きなれない手法を、少しずつでもいいので説明、もしくは体験させていただいたら、その場の話し合いだけではなく実践にもつながるように思う。ファシリテーターの役割の重要性と有効性は、ほんとに実感できた。本来、話すこと聞くことは、こういう努力を要することなのだと感じる事ができた。話し合った内容は、私自身や中高校生向けの問題なので、小学校ではどういった内容ができるか考えたい。

### 6. その他全般を通じての感想・意見など

現地研修までに、自分の問題や自分にとっての国際理解教育を、改めてじっくり考える機会を頂いたことで、より研修に集中できたように思う。きちんとした流れを作っていただいた研修でした。

事前研修のなかで、このなかの何人かが同じマラウイチームだと知りながら、なかなか情報収集する時間が無かった。直前ではなく、自己紹介の中などで言う機会を頂いていたら、一部の人であれ早めの交流が可能で、出発前の情報の少なさからくる不安も軽減されたと思います。

7. 訪問先ごとの気づきと築きなど

・「マナビノオト」に書き留めたことをふりかえり、まとめてみてください。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか/その他感想
7/30(金) リロングウェ →ゾンバ	ドマン教員養成大学 視察	各国に支援によって、様々なプロジェクトが行われている。パソコンが充実し、電化率の低さから考えて、かなり驚いた。海外に出て戻ってこない若者が多いことを知り、外に目を向ける指導に拍車がかからないかとも思った。しかし、情報を持ち、様々な夢を伝えられるという点で、素晴らしい事だとも思う。
	小学校訪問と交流	実際に昔から培ってきた技術(網)を教えることは、今の日本の取り組みと同じだと思った。小学校でエイズ問題に劇や歌で取り組んでいた。子どもから大人に伝わることもあるから、とても有効であると感じると同時に、現実を思い知った。子どもが自慢そうに持っていた手作りボールと木のゴールから、遊びを創造する力の大きさは同じだと伝えたい。
7/31(土) ゾンバ	ドマン水産養殖プロジェクト視察	教えたことが死とともになくなるなど、考えなくてもいいことを考えなくてはいけない。しかし、成功しつつあるグループを見て参加者が出てくるなど、支援者と農民両方に、努力がよい結果を生んでいる。その努力と、明るく働く力強さを伝えたい。また、大溝さんを紹介し、自分の分野で頑張ること・自分は何かができるかを共に考えたい。
8/1(日) ゾンバ→ リウオンデ	リウオンデ国立公園 ツアー(野生生物)	マラウイに来て、初めて観光客を見かけた。国立公園という響きから観光の要と考えていたが、そこへ向かう道には、それを感じさせるものは何も無かった。しかし、やせた土地というイメージがある一方で、強烈な印象と感動を与えるものを育むことができる土地でもある。動物に出会った感動、バオバブのある素晴らしい光景も伝えたい。
8/2(月) リウオンデ→ リロングウェ	小規模灌漑技術開発 調査(Tilime村、 Tikorele村、Mank- hamba村視察)	自信を持って働く人の顔がとても印象的であった。ひとつの成功が、取水口の地主から許可を得たり、水橋の提案につながったりしていた。自信も持つことの大切さを感じた。また、その土地に合った栽培方法の指導、手作りの道具で見られる灌漑の工夫など、技術指導の難しさとその熱意を伝えたい。
8/3(火) リロングウェ →ロビ	現地青年海外協力隊 員との交流・情報交 換会(隊員との昼食 会を含む)	基本の教育は、実際使う場がないような教育内容があろうと、それに付随して幅広く考える力がつくものである。長い目を持てなかつたり、成果がないと動けなかつたりすることも、関係があるのではないか。以上のようなことやその他、体験した人から聞いたことがよかった。様々な努力と苦勞をしている人に多く出会えて、頑張る気力が湧いた。
	マーケット見学	布・トマト・靴など、様々な商品が几帳面に積み上げられていた。洋服の仕立て屋もあり、驚いた。肉を焼いていたり、芋を揚げていたりしたが、その他の加工品は見当たらない。お菓子など、子ども達が欲しがらる物も見当たらないことから、生活面を知らせることに使いたい。
	現地人宅へのホーム ステイ	電気・水道・ガスの無い生活。しかし、生活の知恵が息づいていて、少しの水をうまく活用していた。日本の昔を思った。その後日本は、労力とその時間の短縮が行われ、その分、心も余裕が減ったのではと感じた。また、人をもてなす心の温かさに触れ、大変感動した。実際に体験したからこそ伝わる言葉を大切に、授業を行いたい。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか/その他感想
8/4(水) ロビ→ リロングウェ	ロビ園芸適正技術普及視察	苗をただであげるのではなく、安く譲ることで、農民の真剣さを得るなど、支援の難しさと工夫があった。様々なことを実験し、より土地に合った方法を見つけ、普及していく。しかし、成功を見ないと農民も手を出してはくれず、ひとつの成功が重要であった。
	ロビ・野原隊員任地視察(理数科教師・チュワ中等学校)、生徒との交流	遠い生徒で、17キロもの距離を2時間かけて歩いて通ってくる。さらに、休み時間もほとんどなく、昼食も食わず2時半までがんばっている。真剣な表情に、大変感心した。交流授業は、絵を描いた。配ったのが、いい紙で驚いたようだった。初めて描くとは思えない描写に、大変驚いた。楽しんでもらえて、嬉しかった。また、手品では、私達も子ども達も大変楽しい時間をすごすことができた。
8/5(木) リロングウェ	ミサレ・峯隊員任地視察(理数科教師・中等学校)、生徒との交流	慌しく時間がすぎた。昨日交流授業をしたので、度胸がつき、紙風船と紙飛行機作りにチャレンジした。手先が器用な生徒が多く、みんなで飛行機を飛ばせてうれしかった。見せていただいた授業では、黒板を沢山使い、みんなが真剣にノートに書いていた。傷が入り、見づらい黒板なのに、すごいと思った。
	保健行政アドバイザーとの情報交換	HIV/エイズに関する情報のなかで、高い教育レベルの人の感染率が高いということが、驚いた。知識ではなく、都市部で働けるということが関係しているということだった。将来的に、エイズ治療も無料になるとのこと。感染後の治療もさることながら、感染を防ぐことも進んでもらいたい。
8/6(木) リロングウェ →ケープ マクレア	ムーア博物館見学	生活に根付いた風習の数々を、写真と展示品より知った。美術品や民芸品は、観光客用のみやげ物という印象があったが、そういったものばかりではない。人の生に関する物であったり、行事に使われる物であったりする為、観光客の目には触れられないのであろう。
8/7(土) ケープ マクレア→ リロングウェ	ケープマクレア散策	大変美しい景色だった。ぼーと見つめていたい感覚になった。しかし、住血吸虫がいるので、水に触れないということがすごく残念である。世界遺産とのことだったが、その中には対象外になっている生活地域が何箇所もあり、洗濯風景が見られるなど、持っていたイメージと違う部分もあった。
	JICA 現地関係者との懇親会(7/29のJICA マラウイ事務所訪問オリエンテーションを含む)	電線があるところとは違う所に集落があり、電化率4%という数字に納得した。信号は国内に2ヶ所のみで、電化率からみても本当に必要があるのか分からなかった。マラリアに関しての忠告は、出発前に聞いていたのとは違い、大変ショックだった。マラリアによる死亡率も高いだけに、エイズだけではなく保健行政の難しさを感じた。
全体	全体を通じて、又は上記各訪問先以外の場面	笑顔の輝き、星や夕日の美しさ、見るものに何か神がかり的なものを感じた。思わず合掌してしまうのもうなづける。

## JICA教師海外研修 報告書

提出日	平成16年8月18日	訪問国	マラウイ共和国
学校名	三重県立桑名高校（定時制）	氏名	水野 悟

## 1-1. あなたやグループとしての現地研修への目的やねらい（主眼点・期待など）

私個人としては、マラウイの自然や文化、人の日常生活をじっくり見、記録してきたいという目的があった。  
グループとしては、…

- ① JICA 事業視察：日常の活動で大切にしていることや苦労していることを見聞する。  
具体的には、人を派遣することの意義と成果、農業や漁業プロジェクトの援助の使途、エイズ予防を教育でどのように行っているか。
- ② 様々な交流：学校訪問で、高校生の夢や希望、日課や授業の様子を聞いてくる。  
こちらからは日本の文化や教育の紹介をする。
- ③ 訪問国の特色見学：リウヰの国立公園では、野生動物への扱いや環境変化を、  
ケプマリアでは、その地域と区域外との森林（自然）の比較を、  
ムア博物館では、マラウイの歴史（家族を含む）と民族文化を学んできた。

## 1-2. その目的やねらいの達成度

- ① 現地で働く隊員や専門家のみなさんの情熱と生きがいを知った。  
自らが担当している分野に誇りを持ち、それでもすまない現状へのいらだちや矛盾を、人々の気質や現地の文化を理解しようとする努力によって克服しているように感じた。
- ② 子どもや生徒たちから活力、パワーをもらった。  
興味や関心、情熱は出し惜しみしてはいけない。今あるものを使って、そしてその中で楽しみ学ぶ生活があることを知った。教育はいい受け手を育ててこそ成り立つんだ。
- ③ 朝、夕の太陽のうつくしさ、自然に囲まれて生きることのすばらしさを感じた。  
自然が貴いのは、人がそこに導かれるだけで安心でき、穏やかな気持ちになれることだ。  
自然が保たれること、日本の変化ある四季に感謝したい。

## 2-1. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

1. 各地域や訪問先の学校で子どもたちがいっせいに駆け寄ってくる様子には、彼らなりの気持ちや目的があるのだろう。例えば、めずらしさや興味、あるいは何かもらえるのではないかと（「give me money」）との期待であるのかもしれない。しかし、ウェルカムと体全体で表現してくれることには感動を覚えた。それは、“そのままのあなたがそれでいい”とされているのと同じだからだ。
2. 中等学校生徒の授業に対する（わかろうとする）真剣なまなざし、積極性（多い挙手）に驚いた。日本ではいつの間にかこの雰囲気なくなったのだろう、なくしてしまったのだろうと思った。しかも、我々の授業を楽しみ、乗ってきてくれた生徒に改めて感謝したい。受け手と一体になることこそ、教室の醍醐味なんだ。

3. モザンビーク側から昇る朝日に感謝、ザンビアへ沈む夕日に感動。アフリカの太陽というだけで新鮮だった。Cape Maclear は裏切ることなく、ひととき私を南国の雰囲気に入れてくれた。ゆったり湖岸で過ごせた時間が懐かしい。しかし、地域を潤わしても、この国の人々を豊かにするわけではない。

## 2-2. 参加者・スタッフから学んだこと（気づいたこと、大切に思ったこと、嬉しかったことなど）

参加者のみなさんは、本当にたくましい。マラリアの危険、食事やホームステイへの不安などものともせず14日間を乗りきった心身の鍛錬に感心しました。また、空港やホテルでのトラブルに親身になってまた、親切に援助していただいたことに感謝しています。

スタッフのお二人には、その冷静さと堅実さに学ぶこと大でした。夜のミーティングも、翌日以降につながる motivation を醸し出してくれました。ありがとうございました。

何より私に必要なのは、いつでもどこでも open mind だと、気づきました。

## 3. 現地研修の経験の 何を何につなげよう と思ったか

1. 大溝さんの言動、隊員たちの姿：「マラウイ人＝人一般」、Chdochi 村の子どもたちに向かって「おまえたちには将来がないもんな」、「今日は食べたか」。隊員たちは肉体的には疲れているのですが、そのいきいきした顔（ここまで来ていているのだから、そうなんだろうという願望かな）。→ 私の言葉で生徒に話す。（見たこと、聞いたことすべて私の感覚という bias がかかっている。それを承知して伝える）

2. マラウイの子どもたち：お腹をさすり手を差しだした子どもの姿。私たち外国人に向かって子どもたちがいっせいに駆け寄ってくる様子。→ 心を開く。感情を豊かに、行動で表す。（“そのままのあなたがそれでいい” と）

## 4. JICAの開発援助事業に対する感想や提案

教員だけでなく、人を理解しようとする仕事に携わる人々にとって必要な体験です。「百聞は一見に如かず」とは、聞き下手な私にぴったりの言葉です。否応なく見、聞きすることのほとんどが新鮮な驚きと刺激に満ちていました。

若干の注文を申しますと、期間をもう少し長くとり、他分野（病院や軍隊、他の自然など）を見たかったという欲が残りました。

今後とも是非、継続して行って下さい。

## 5. 研修（事前研修等を含む）に参加して良かったことや、より良くするための提案

私の教育力（ワークショップを含むスキル）を広げ、開拓したいという欲求を満たしてくれる研修です。しかも、海外研修とタイアップできて幸いでした。「伝える」という教育の素材をたくさん得られたこと、教師としての私の姿勢を見つめ直させてもらえたという点で、その価値があります。

評価や価値判断をあまりしないのがファシリテーターの役割だとは思いますが、それでも個人の意見や感想を伝えるという場は必要だと思います。

## 6. その他全般を通じての感想・意見など

人とのつながり、やさしさ、自分をふりかえることの大切さを改めて知ることができた研修であり、旅行でした。

7. 訪問先ごとの気づきと築きなど

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか/その他感想
7/30(金) リロングウェ →ゾンバ	ドマシ教員養成大学 視察	国全体で7校しかない初等教員養成大学の一つであるが、女子学生の数が少ない。それは、中卒試験の合格率に比べ、高卒試験にあたる MSCE の合格率が激減 (60.0%から 14.3%へ) している状況と一致している。まだまだ教育におけるジェンダーの克服がほど遠いということである。
	小学校 (Nchilima) 訪問と交流	子どもたちがいっせいに駆け寄ってくる様子には、彼らなりの気持ちや目的があるのだろう。例えば、めずらしさや興味、あるいは何かもらえるのではないかと (「give me money」) との期待であるのかもしれない。しかし、ウェルカムと体全体で表現してくれることには感動を覚えた。それは、「そのままのあなたがそれでいい」と言われているのと同じだからだ。翌日の村の女性たちのゴスペルも同様です。
7/31(土) ゾンバ	ドマシ水産養殖プロ ジェクト視察	大溝さんの言動に圧倒された。Chdochi 村の子どもたちに向かって「おまえたちには将来がないもん」といって頭をなでる。マラウイ人=人服、着ている服はすべて外国からの donation で、それを安く売っている。毎日食事する余裕はない (アメリカ人経営の農園で働く日払いが 50kw)。Mpasuka 村の養殖魚 (チャンボ) を網ですくい上げ、一瞬しか見せない (大切に育ててきた貴重なもの。それを食べさせてくれた)。
8/1(日) ゾンバ→ リウオンデ	リウオンデ国立公園 ツアー (野生生物)	Double booking で泊まれなかった Mvuu Camp が心残りだが、リウオンデからの帰路、偶然野生の象に巡りあったのはラッキーだった。野鳥や野生動物が大切に保護されている様子には、人々の生活との乖離が感じられた。ここまでできるのなら…生活レベルもな、とよけいなお世話。翌朝、河巡りの間の盗難にさもありなんと感じてしまった。
8/2(月) リウオンデ→ リロングウェ	小規模灌漑技術開発 調査 (Tilime 村、 Tikorele 村、Mank- hamba 村視察	Zomba の Ku Chawe Inn といひ、昼食を食べた Senga のリビングストン=アビチルといひ、視察先とのあまりの違いに神経が麻痺する思いです。家泉さんの細い体躯に秘める気持ちが、言葉より実際に見た灌漑施設と整然と耕された畑(ダンボを Basin へ)に如実に表れていた。簡単なラインレベルを使ってこう配をつける、water bridge をつくり啓発する、バドアウトでなく「実施しながら学びながら」頭に残していく手法など、自立を促す要素がたくさん見つかった。
8/3(火) リロングウェ →ロビ	現地青年海外協力隊 員との交流・情報交 換会	隊員たちは肉体的には疲れているのですが、そのいきいきした顔 (ここまで来ているのだから、そうだろうという願望かも) に意欲と活力が見えた。
	マーケット見学	店先に山羊の頭をつるした店主、地酒チブクに酔っぱらう姿、デジカメに興味を示す人々、カメラのレンズから逃げる少女たち、そんな人々が集まり品物にあふれる市場にマラウイの『豊かさ』を見た。
	現地人宅へのホーム ステイ	Mr.Mkhutu さん宅にお世話になる。妻 Zione さんと娘 Wendie ちゃんの3人家族、中学の理科の先生だが質素な生活だった。3LDK の借家で電気はあるが、家具はソファとダイニングテーブル、私が寝たマットなしのベッドだけである。テレビがあったのにはビックリ。シマ (マイズのこがしを熱湯でこねたもの) を庭先でつくり、食べる前に Zione さんがお湯を手にかけてくれ面映ゆかった。クリスチャンであるためか期待したお酒は出なかった。

月日	訪問先等	発見したことや学んだこと→それを何につなげるか/その他感想
8/4(水) ロビ→ リロングウェ	ロビ園芸適正技術普及視察	Lobi 郊外の丘の上に登ると、いつものごとく子どもたちもいっしょについてきた。いつの間にか学校の遠足気分だ。人なつこさと歓待は同じものなのだろう。 日本の農業時術の工夫（山羊の食害から果樹を守る囲いや堆肥作成）が隊員の手で、そして現地の言葉で伝えられていることに素直に感動できた。
	ロビ野原隊員任地視察（理数科教師・チュワ中等学校）、生徒との交流	休み中で補習者が登校しているとのことだが、授業に対するまじめさ積極性（挙手が多い、わかろうとする）に、日本ではいつの間にかこの雰囲気はなくなったのだろう、なくしてしまったのだろうと思った。 しかも、我々の模擬授業を楽しみ、乗ってきてくれた生徒に改めて感謝したい。
8/5(木) リロングウェ	ミサレ・峯隊員任地視察（理数科教師・中等学校）、生徒との交流	授業も2日目だから、少しは工夫しようと自慢？の手品に受けをねらった演出を加える。それを見破ろうとする者、懸命にチャレンジする人とみんなに支えられた30分だった。 ペンパルの申し込みを受け、彼らの外国へのあこがれや互いに繋がりたいという変わらぬ気持ちを感じ取れた。
	保健行政アドバイザーとの情報交換	平均余命38.5歳、HIV感染者90万人（7.8%、成人は15.0%）、毎年8万人がエイズで死亡、エイズ孤児32万人等々。エイズの防止教育だけでなく、ジェンダーの解消に向けた取り組み（割礼や女性労働、役割分業の差）が必要なことがわかった。（笠原氏） 中山氏のレポートは内容の濃さだけでなく、現地の隊員向けに開発勉強会を組織し、彼らの motivation を高める作用も果たしていることに驚きました。
8/6(木) リロングウェ →ケープ マクレア	ムーア博物館見学	Malawi の歴史やその initiation の多様さの発見が新鮮だった。Initiation の性差、女性の犠牲、日本の Initiation との比較とその影響などを考えた。 それにしても昼食時、携帯したサンドイッチを食べている傍らに来て、お腹をさすり手を差しだした子どもの姿が脳裏に焼き付いて離れない。
8/7(土) ケープ マクレア→ リロングウェ	ケープマクレア散策	宿泊地 Club Makokola の豪華さ、差別化に驚嘆、部族の芸能に堪能、モザンビークから昇る朝日に感動。アパルトヘイトに反対してこなかった Malawi に、南アの財閥がつくつたらしい。 Cape Maclear はやはり南国の王様にしてくれた。ゆったり湖岸で過ごせた時間が懐かしい。しかし、その場を潤わすだけで、この国を豊かにするわけではない。
	JICA 現地関係者との懇親会（7/29のJICA マラウイ事務所訪問オリエンテーションを含む）	懇親会というよりお礼の気持ちが先行したひとときでした。 拙い芸がお恥ずかしい。 到着当初のオリで警告されたマラリアや防犯への注意は、二週間の緊張を保つ為に必要なものでした。
全体	全体を通じて、又は上記各訪問先以外の場面	JICA のみなさん、お世話様でした。そのご尽力に感謝します。 遠い異国でのたくましい精神力と morale に学ぶこと大でした。 「ふりかえり」と感想ばかりで、学んだことや何につなげるかといった視点が希薄になっています。ご了承下さい。